
緋弾のARIA

宮川明

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

緋弾のアリア

【Nコード】

N4879T

【作者名】

宮川明

【あらすじ】

アリアの二次創作です。無茶な設定から物語が展開しますがよろしく願います。主人公はその都度変わる変な設定です。まあ、よろしく願います。

キャラ紹介（前書き）

更新あり

キャラ紹介

みやがわあきら
宮川明。

二つ名 雪山の狐 魔弾の射手

所属：ロシア陸軍狙撃部隊 自由同盟（第108代目指導者）

名前からは想像できないが日本人とロシア人のハーフ。本名は明・宮川・ラスプーチン3世。ロシア帝国崩壊の原因を作った謎の人物『グリゴリー・ラスプーチン』の子孫であり、レキと同じくウルス族の末裔の中で唯一の男性でもある。若干10歳でロシア軍に6年程度所属していた経歴があり、銃の扱いや乗り物の扱い、格闘戦闘に長けている。腕の力は相当で、反動の大きいM82も軽々扱い、デザートイーグルも片手で扱っても何の障害もない。研修にてイギリス軍に居た時にアリアに目を付けられ、契約した（本人は不快とは思っていない）。

狙撃科に属し、狙撃の腕はレキと並んでいる。魔弾を使えば、どんな所に居る目標でも撃ち抜くことが出来る

携帯武器としては主にM82（重量は11kgまで軽量化されている）（対人には自製の特製弾を使用する）とPSG-1を背中に背負っており、太腿のホルスターに改造（スコープ付きロングバレル）デザートイーグル（ブラックモデルとシルバーモデル）2丁とコンバットナイフ2本ずつ足と肩に挿している。また、自室には2本の刀（日本最高傑作で国宝の『大包平』と『童子切』）がある。

ちなみに、大包平と童子切は東京国立博物館に展示されている。

武偵殺し 1

- 羽田国際空港 -

「ここが日本ね。」

薄い紅い髪（どちらかというところピンクに近い）を靡かせて、一人の少女がターミナルから出る。

「アリア、頼むからもう少しゆっくり歩いてくれない？」

と、後ろからは一人の青年。背は大きいが、高校生である。ちなみに、先程のアリアと呼ばれた少女は背は非常に小さいが高校生である。

「そんな重い銃を背中に背負ってるからよ。」

「ひどいな。僕の腕を知っているだろ。」

青年の背中には2つの大型ライフルが背負われている。片方は『M82』。非常に殺傷力が高く、イラク戦争では1500m先にいた敵を両断したという逸話まである。もう片方は『PSG1』。ミニオンオリンピック事件の反省から開発された世界に通用する精度のセミオート式狙撃銃である。しかし、非常に高額なことから個人携帯では嫌われている。

「分かってるわよ明。でも、」

すると、電波探知機が鳴る。電波探知機を見て、アリアは

「行くわよ。」

明と呼ばれた青年も目つきを変え、アリアの後を追った。

- 東京湾 メガフロート（通称 学園島） -

メガフロートは元々は環境に与える影響が少ないこと、地盤の問題が無いことから空港設備として計画されたものだ。これを空母にしようと言う動きが日本の高度経済成長期にあった（当時はメガフロートなど考えられなかった為、別物ではあるが）

「何でこんな事に？」

そのメガフロートの上はいわゆる学園都市であり、その都市の中を一台の自転車で疾走する高校生が居た。正確には一台ではないが

「それ以上スピードを落とすと爆発してやがります。」

変な発音だが、言っていることは恐ろしいことだ。現在、この自転車の座席の下には爆弾が仕掛けられており、それに乗った高校生は銃座付きのセグウェイが追尾している。

セグウェイとは、アメリカの発明家『デイン・ケーメン』が発明した一応二輪車に格付けされる物である。発売後はアメリカの一部の警察や郵便局やらに無料で貸し出されて好評だった。現在ではセグウェイでの移動を認めていない地域もあるが、アメリカでは多くの州で乗られている。日本では2006年に販売を開始された。公道はまだ走ってはいけないことになっているが、現在は搭乗型移

動ロボットが某市での実証実験区の認定を受けた事によって、セグウェイも公道を走れるようになるのではないかと期待されている。

「次の角を左に曲がりやがれです。」

高校生は言われたとおり左に曲がった。そして、彼の通う学校の女子寮が見えてきた。その屋上には2人の人間が居ることに気づく。

「何で、あんな所に？」

- 女子寮 屋上 -

「準備はいい？」

「ああ。」

明はM82を構える。アリアは、パラグライダーをチェックする。異常が無い事を確認し、アリアは屋上から飛び降りるのであった。

「う、嘘だろ!？」

高校生は驚く。突然、屋上に居た少女が飛び降りたのだから当然だ。しかし、途中で少女はパラグライダーを開き、高校生の自転車と併走する。

「あ、あんた。伏せなさい。」

少女に言われ、高校生は訳が分からなかったが、突然の轟音と共に

後ろを走っていたセグウェイはバラバラになった。高校生は屋上を見ると、大型の狙撃ライフルを構える同じ制服を着た青年がスコップを覗いていた。

「ぶ、武偵高の生徒！？」

高校生はそう言い、パラグライダーで併走する少女を見る。先程は気が動転していて気が付かなかったが、少女も同じ制服を着ていた。

「あんた、準備は良い？」

「は？」

すると、少女はパラグライダーを操り、高校生の前に出る。そして、取っ手の部分に足を入れ、逆さ吊りの状態で接近してきた。

「ば、やめろ。この自転車には爆弾が仕掛けられている！！お前まで巻き込むぞ！！」

「武偵法、第一条。仲間を信じ、仲間を助ける。私を、信じないさい！！」

そう言っアリアは自転車に乗る高校生を掴み、自転車から無理やり降ろした。自転車は横転し、暫く転がった所で爆発するのであった。そして、その爆発で2人は武偵高の体育倉庫の跳び箱の中に仲良く突っ込むのであった。

「あれ？」

爆発するまで捕捉していたアリアとアリアの助けた高校生の姿を見失い、明は戸惑った。

「ど、何処に行った？」

必死にスコープを覗いて探すが、見つからない。仕方なく、無線で呼びかける。

「アリア、アリア。聞こえるか？応答しろ？聞こえないなら片っ端からライフルを乱射するぞ。」

半分冗談だが、無線から聞きなれない声が入ってきた。

『ちょ、ま、やめてくれ。頼むから』

「あんた誰？」

明は突然入ってきた男の声の主を訪ねる。すると、アリアの声も聞こえてきた。

『変態！変態！へんたーい！！この恩知らず！！』

かなり大きな声で明は鼓膜が破れそうになった。しかし、アリアの声が聞こえ、先程の男の声も合ったという事は二人とも無事だと言う事が分かり、明はほっとした。しかし、二人に新たな脅威が迫っていることを見て、ライフルを構え直すのだった。

- 体育倉庫 -

ようやくアリアは落ち着いた。と、言うか落ち着かなければならぬ状態に陥っていた。なんと、増援のセグウェイが数台駆け付けたのだ。そして、銃座のウージーサブマシンガンを乱射してくる。

「この跳び箱が防弾じゃあなければ、今頃はあの世ね。」

アリアは跳び箱に先程助けた高校生と一緒に入っていた。なんの偶然か、爆発の衝撃で体育倉庫に突っ込み、これまた何の偶然か二人とも跳び箱の中に突っ込んだのだ。

「あんたも戦いなさいよ。仮にも武偵高の生徒でしょう?」

そう言っただけアリアは反撃を行うが、ウージーの弾幕は凄まじく、なかなか有効な反撃が出来ない。

「聞こえる明? そっちで攻撃してくれない?」

『してもいいが、こっちも面倒になった。』

「どうしたの?」

『マシンガンをつけたラジコンヘリが攻撃を仕掛けてきた。暫くは援護できない。』

明の無線からも銃声が聞こえてくる。もはや、一刻の猶予も無かった。

「あんた、反撃できないの？」

「む、無茶言っなよ。」

しかし、

（まずいな。）

彼の出したくない本性が現れ始めた。その時、銃声はやみ、一旦セグウェイの軍団は離れていった。

「やつののか？」

「一時的に追い払っただけよ。また来るわ。」

そう言っアリアは空弾倉を排出し、満弾倉を入れる。

「強い子だ。それだけでも上出来だよ。」

「な！？」

突然、キャラが変わったようにアリアをお姫様抱っこする高校生。そして、跳び箱から出て左側にある平均台の上にアリアを座らせる。

「ちょ、あんた。どうしちゃったのよ？」

「銃なんて危ないものを振り回すんじゃない。」

そう言っアリアの肘を掴んでガバメントをホルスターに戻した。

「な、なんであんた。さつきとキャラ変えてんの？」

アリアは聞くが、高校生はそれに答えず。

「銃を撃つのは僕一人で十分。」

高校生は再び銃撃が開始された中に入っていくのであった。

- 女子寮 屋上 -

「一体、何機来るんだよ!？」

既に8機撃墜した明は、いい加減うんざりしてきた。

「くそ!！」

9機目を撃墜した所で、思い切って遮蔽物から出ると。しかし、敵の攻撃は無かった。

「やったな。」

そう言つて、体育倉庫の見える位置に行き、体育倉庫の方を見る。

「何やってんだ? あいつは?」

裸眼で何と両目7・0を記録する明は、600mほど離れている体育倉庫の様子を確認することが出来た。

飛んでくる7発の銃弾を避け、避けざまにベレッタを撃ち、銃座に備え付けられているウージーの内部に銃弾が入り、爆発した。セグウェイ全滅。明とアリアは信じられない者を見た感じだった。

「さて、終わったよ。」

高校生は跳び箱の中で制服を直しているアリアの許に近づく。そして、スカートのベルトが切れている事に気づくと、自分のベルトを外して跳び箱の中に投げ入れるのだった。

- 女子寮 屋上 -

「凄いな。」

先程の光景は、この目で見たのに明はまだ半信半疑だった。とりあえず、付近の警戒を行う。しかし、数回スコープを動かし、また体育倉庫の入り口に戻すと、なにやら二人は喧嘩をしていた。

「何してんだ？」

無線からは

『私はねえ、今まで犯人を逃したことは一度も無いのよ。』

と、聞こえてきた。

「それは立派なことだ。」

高校生はただ、それだけを言った。アリアは、弾倉を替えようと探るが、見つけれられない。

「この事？」

高校生はアリアの弾倉を校門の外にある木に向かって投げた。すると、アリアは

「あー！！絶対に許せない！！」

銃をホルスターに戻し、背中から刀を二本取り出した。

「刀も使えるのか？」

アリアは刀を構えたまま突進するが、目の前で盛大に滑る。みると、銃弾が至る所に転がっていた。

「ごめん、撒かせてもらった。」

高校生はポケットから一発の銃弾を取り出し、アリアに見せる。アリアはもう一度立とうとするが、銃弾を踏んではまた滑る。その間に、高校生は逃げ出すのだった。

「か、風穴をあけてやる！！」

アリアは高校生の背中に向かって叫ぶのだった。明は無線で

『どうする？頭を狙っているから撃てと言われればご希望通りに大きな風穴を開けますよ。恐らくは撃たれた部分は両断されるだろうけど。』

と、アリアに言った。

「別にいいわよ。撃つ必要もない。」

ただ、そんな声が返ってくるだけであつた。

奴隷

- 武偵高校 -

「事情で遅れました。」

そう言っただけ、爆弾付き自転車で学園島を疾走していた高校生が教室へ入った。すると、

「私、あいつの隣が良い。」

アリアは入ってきた高校生を指差して言う。

「いい！？」

その高校生も驚いた。そして、教室の生徒はその高校生を見る。

「キンジ、とうとうお前にも春が来たんだな。」

など、半分冷やかしの言葉をキンジと呼ばれた高校生に言う。

「先生。俺、くじ引きでキンジに隣になったけど、転校生さんに席譲ります。」

そう言っただけ、先程の冷やかしの言葉を言った高校生は席を替わろうとする。

「な！？おい、武藤。頼むからやめてくれ。」

武藤と呼ばれた、席を譲るといった高校生はキンジを見て。

「まあ、そう言うなよ。せっかくお前に春が来たんだ。」

そして、アリアはそのキンジの所に行き、先程のベルトを返す。さつき、店で新しいスカートのベルトを買ったのだ。

「これ、返すわよ。」

「お、おう。」

「キンジって言うのか。さつきは大丈夫だったか？」

明もキンジの所に行って言う。明は狙撃手としては超一流の腕前で、数々の逸話も持っている。

「あ、ああ。……って、言うかお前らは何なんだよ？」

「先程の説明どおり、転校生だよ。」

だが、春が来た！。は、次第にエスカレートし、恋愛話まで浮かび上がった。そして、この言葉がアリアの怒りの引き金となった。

「いやーね、キー君とアリアさんってモテモテね。」

そう、探偵科のおバカキャラ（情報収集能力は一流）。峰理子と言った瞬間、アリアはカバメントを抜き、窓と横壁に向かって数発撃つ。そして、

「れ、恋愛なんて下らない。全員、覚えておきなさい。そう言う馬鹿な事を言う奴には風穴開けるわよ!!」

天井に1発、本気だと示す様に放った。

- 放課後 キンジの部屋 -

「分からん。何なんだあいつ等は?」

授業を終え、部屋に戻ったキンジは自問自答しながらソファに腰を下ろしている。そこに、携帯のメール着信音が鳴る。

「また、白雪か。」

そう言つてメールボックスを開くと、案の定白雪だった。

「一日に何通メールを送ってくるんだ?」

今日だけで8通。普通はこんなにメールを一日にはしないのだ(短い会話的メールは別)。

「こうして見ると、今朝の爆弾騒ぎは嘘みたいだな。まさか、俺が武偵殺しに、いや、武偵殺しの模倣犯に狙われるなんて。」

武偵殺しは捕まったと、武偵高の生徒はメール配信で知らされている。だから、今回の事件は模倣犯だとキンジを含む武偵高の生徒は

思っている。

「でも・・・どうして俺なんだ？俺が名指しされたわけでもない。」
チャイムが鳴るが、無視し続けようとソファーに寝る。しかし、出ないとチャイムを鳴らすのをやめないらしい。何度も鳴り続けている為、キンジは観念してドアを開ける。

開けた瞬間

「遅い！！」

扉にはアリアが、扉の影になっている場所には明が居た。

「か、神崎に明。」

明は微笑みかけるが、アリアは

「アリアで良いわよ。」

と、勝手に入って行った。

「ちょ、ま、勝手に入るな。」

キンジはアリアは追って行ったので、明も部屋に入った。旅行ケースを持って。

窓の所にアリアは行き、キンジはその後を追って奥に行く。

「おい、神崎。」

と、そこでアリアは振り向き

「キンジ。アンタ、私の奴隷になりなさい!!」

その瞬間、キンジは凍りついた。まあ、気持ちは分からんでもない。突然、奴隷に成りなさいと言われて、「はい、そうですね。」なんて言う人間は居るのだろうか？

- 寝室 -

とりあえず、明はキンジを寝室へと呼び込み、事情を簡単に説明した。朝の一件でアリアが気に入った事などを話せる範囲内で。

「それで、お前もアイツに雇われたのか？」

「どう思っ？」

「どうって、変わってるな。あんな奴と一緒に居てやってけるのかよ？」

「現に今までやって来た。これからもな。」

背中には重そうなM82とPSG1を背負っている明は、事情を聞けばロシアと日本のハーフだと言う事が分かった。そこへ、扉が開き

「ねえ、コーヒー用意しないさい。それと、お腹減った。」

と、突然言ってきた。明らかに命令口調。

「あ、そうだ。この辺に『もまん』売ってるお店知らない？私、それが食べたい。」

そんな訳で、キンジは注文されたもまんとコーヒーを出す。

（もまんって、そんなに旨かったか？）

買って来たもまんと美味しそうに食べるアリアは既に、もまん5個目を食べている。

（わからん。こいつの好みが。）

明は白い米だけのパックとカロリーメイトを食べている。それ以外は一切口に運んでいない。

（米だけでよく食えるな。）

米は殆ど無味であり、基本的にはおかずと一緒に食べるのが一般的だ。それなのに、明は米だけのパックで普通に食べている。

（まあ、噛めば甘くなるし、いいんだろう。）

唾液は炭水化物を糖に変える働きがあり、噛み続けて米が甘く感じるのそれが原因である。

（そして、アリアはインスタントコーヒーを知らない。）

アリアは只のインスタントコーヒーをギリシャコーヒーやら何やらと、逆にキンジの知らないコーヒーの銘柄を言うようになる。

「それよりも、神崎。」

「アリアで良いって言ってるでしょう。」

「じゃあアリア。さっきの奴隷って何だよ？どどういう意味だ？」

「強襲科アサルトに移って、私の組むパーティに入りなさい。一緒に武偵活動するの。」

武偵活動は単独でも行えるが、基本的にはチームを組んでやるのが一般的である。そして、武偵の何人かは既にチームを正式には決まっていらないが殆ど行動を共にしている。

「なに言ってるんだよ？俺は強襲科が嫌で転科したんだぞ。」

武偵高校は転科希望書を出せば比較的簡単に科を変えることが可能であり、キンジも強襲科から探偵科に移っている。

「戻るなんて無理だ。それに、俺は武偵自体やめようとしているのに。」

アリアは左手を出し、3本の指を立てながら

「私は嫌いな言葉が3つある。」

「人の話を聞けよ!？」

アリアはそれを無視して

「無理、疲れた、めんどくさい。この三つは人間の持つ無限の可能性を押し止める良く無い言葉。二度と私の前では使わないで。」

確かに、論理は通っている。人間の持つ可能性が無限大であることは大昔から証明されており、その言葉を言えば可能性を捨てるも当然であつた。

「キンジのポジションはそうね・・・、明は狙撃でサポートだし。私と一緒にフロントが良いわ。」

「良くない。そもそも、何で俺なんだ？」

キンジがアリアに聞こうとするが

「君は仮にも武偵だ。武偵なら自分で調べればいいだろう。丁度、君は探偵科だし。」

明は言った。アリアもそれに同意する。

「じゃあ、そのチームに加入するのを断つたら？」

しかし、アリアは暗い顔になって

「もう、時間が無いのよ。もし、探してたのがあんたじゃ無ければ。」

「え？」

だが、直ぐに明るい顔に戻って

「とにかく、チームには何が何でも入ってもらわよ。うんって、言わないなら。」

「なら、どうする?。」

「泊まってく。明とそのつもりで来たんだし。」

キンジは驚いて椅子から立ち上がる。

「ちょ!、ちょっと待て!。何言ってるんだ!? 絶対駄目だ。」

「うるさい! 泊まってくったら泊まってく。」

アリアは振り向いて、テレビの前に置かれた旅行ケースを指差し

「長期戦も想定済み。」

「それ、お泊りセットかよ!。」

「出てけ!。」

「はい!?。」

突然、アリアにそう言われてキンジは驚く。アリアは腕を振り上げて

「分らず屋はお仕置きよ。外で頭冷やしてきなさい。」

そう言われてキンジは追い出される。

- キンジの部屋 -

「アリア、本当にあれでいいのかよ？探してたパートナーかもしれないの？」

「いいのよ。私の言う事を聞かないなら頭を冷やさせるまで。」

アリアはスタスタと風呂場の方に行く。

「何処へ？」

「お風呂。覗いたら殺す。」

「誰が覗くかよ。」

アリアはそう言って風呂場に入る。明はベランダに出て、月明かりを楽しみながら専門の器具を用いて銃の整備を始めた。まず、M82の銃身内を掃除し、分解して異常が無いか一通り見る。普段なら30分程度の整備だが、今回は久しぶりの発砲で入念な整備を要した。その為、2時間以上整備に時間が掛かった。そして、終わったと思ったその時

「し、し、死ねー！！！」

部屋から大声が聞こえたかと思うと、ガラスが割れる音とキンジの悲鳴が聞こえた。

「何かやったのかキンジは？」

ベッドに入った。キンジは2段ベッドの右側の下。アリアは左側の上。明は玄関の所に狙撃銃を膝の上に置いた状態で眠る。何時、何時敵が来るかも分からない。その為、警戒は常に怠っていないかった。

理子の調査報告

翌朝、キンジをアリアが起こそうとするが、なかなか起きなかった。その為、アリアに思いっきり顔を踏みつけられてようやく起きた。

「やばい、遅刻する。」

キンジはそう言い、アリアから逃げるように去って行くのは言うまでもなかった。その日の夕方、キンジは探偵科の理子にアリアと明の身元などの調査結果を聞きに女子寮下の温室へと赴いた。

- 温室 -

「キー君。」

手を振って理子がキンジを出迎えた。

「相変わらずの改造制服だな。普通の制服着て来いよ。」

理子は普通の制服ではなく、ロリータ服と言う物を好んで着ていた。そう言う所には校則は緩いのだ。

「まあいい。それと、ここでの事はアリアと明には内緒だぞ。」

「うーラジャ。」

と、両手で敬礼みたいなポーズをする。それを確認し、理子がこの情報収集の報酬として指定してきたギャルゲーの入った紙袋を渡し

た。理子は、その中からシリーズの『2』やら『3』やらが付くゲームを返品したが、一応報酬を受け取ったということで調査結果を報告する。

「まずは武偵評価を教える。」

「はい、まずは二人とも武偵ランクはS、明らかに天才ね。それと、二人とも両利き。」

「アリアは分かるが、明もか？」

「ええ、彼の足と肩には2本ずつコンバットナイフを挿しているの。それに、両太腿には拳銃が入ったホルスターが有ったでしょう。」

「あの背中に背負っているライフルでそこまで目が回らなかった。」

「ふーん。」

理子は顎に指を当てる。

「じゃあさあ、これって知ってる？」

「何？」

「アリアって二つ名で『双剣双銃のアリア』って呼ばれてるんだよ。それに、明は今は一時除隊の身だけど元ロシア狙撃部隊所属で『雪山の狐』って言われていたらしいよ。」

「雪山の狐？」

「演習で極寒の地域の狙撃訓練部隊として参加していたらしいの。その時に彼は視界不慮の中を次々と仕留めていったらしいの。」

「なるほど。狐みたいに賢く、それでいて警戒心も高い。だから視界不慮でも早めに仕留めたって訳か。」

キンジは納得する。

- 狙撃科 -

「狙撃手は、ただ待つこと。待つて、待つて、待ち続け。獲物がスコープの十字架に掛けられたその時、私は全てを解放する。」

その瞬間、明はM82の引き金を引き、約1.5km離れた的を撃ち抜いた。しかも、ど真ん中に。歓声も上がる。狙撃科でもこんな遠距離の目標でど真ん中を撃ち抜ける人間はそうそう居ない。

「レキといい勝負だな。」

狙撃科の一人がそう言ってきた。

「レキ？」

明はレキと言う単語を聞き取り、意味を聞こうとすると

「ほら、あそこあそこ。あそこで座っている奴。ロボット・レキつてあだ名だが腕は確かだよ。」

指差した先には緑の鮮やかな髪をした女子がドラグノフを傍らに立

て掛け、ヘッドホンで音楽を聴いている。

「何を聞いているんだ？」

明はレキと呼ばれている女子の所に行き、聞いている曲名を訪ねる。レキは明のほうを向き、

「音楽ではありません。ただの風の音です。」

立ち上がってそう答えた。

「か、風の音？」

明はキョトンとする。そこへ、狙撃科担当の南郷先生が来る。

「明君は優秀な狙撃手だね。どうだろうか？ここに居るレキ君と勝負してみないか？」

「レキと？」

明はレキを見る。ドラグノフは精度こそPSG1に劣るが、熟練した者が扱えば恐ろしいほどの精度にまで跳ね上げることも可能だ。そして、明も狙撃手。目の前のレキが只者でないことは直感で分かった。

「すみません。彼女に勝てる自信がありません。」

最大命中射程2700mの記録を持ち、通常の時でも2530m先の目標を撃ち抜ける明だが、レキとは出来れば敵として戦いたくは無いと考えた。

「つまんねな。」

他の生徒はがっかりする。まあ、突然現れた人間の力量を測りたいと言っ気持ちも分からないでもない。

- 男子寮 -

明はその後、授業を終えてキンジの部屋がある男子寮まで来た。そして

「キンジ？」

偶然、理子の調査報告を聞いて戻ってきたキンジと会い、二人で部屋に戻った（キンジも仕方が無いので許可した）。

「遅かったわね。」

部屋に入るとアリアがソファで髪を直している。それを見たキンジは

「へえ、貴族様は身だしなみにも気を使っつて訳か。」

それを聞いて明は拳銃を抜き、キンジの後頭部に押し付ける。

「調べたんだな？」

「ロシア軍の優秀な狙撃兵さんは近距離戦も出来るのか？」

「馬鹿にしないで欲しいな。狙撃だけでなく、色々と学んだぞ。航空機の操縦や船舶の操船、車やらヘリやら。それに、CQCも習った。」

CQC。近接戦闘を意味する言葉で、極めて至近距離まで接近した状況を想定して考え出された武術の一種でもある。イギリスのウィリアム・フェアバーンが柔術や中国武術などを基に編み出した無音殺傷が始まりとされている。

「明、銃を降ろして。」

明はアリアの言われたとおり銃を降ろし、ホルスターへ納めた。まあ、彼も武偵。それに自分で調べたらと言ったから本気で発砲も出来ない。

「それで、何処まで調べたの？ 大方、理子って奴にでも協力して貰ったんだろうけど。」

明はキンジに聞く。

「アリアが貴族で英国政府にもある程度顔が利くって事と、ロンドン武偵局に勤めていて一人も犯罪者を逃がさずに99回連続逮捕記録保持者。明は元ロシア軍狙撃部隊所属で『雪山の狐』と呼ばれていた。腕は優秀で研修にてロンドンに居る時にアリアと出会い、そこで武偵としてアリアと共に活動していた。そんな所かな。」

キンジは理子の調査結果を述べる。

「ふーん。でも、一人この間逃がしたは。」

アリアはキンジの方を見て言った。

「へー、Sランクの双剣双銃様から逃れられる犯罪者も存在するのか。」

「アンタの事よ。」

その瞬間、ほんの数秒だが時間が止まった。

「はあ！？、何で俺が犯罪者なんだ？」

「だって、強猥しようとしたじゃない。あれは立派な犯罪、許せない。」

床をがんがん踏み付けながらアリアは言う。顔は真っ赤である。

「とにかく、昨日も言ったとおり強襲科で私の奴隷として働きなさい。そして、私から逃げた実力をもう一回発揮しなさいよ。」

「な！？俺はEランク武偵だぞ。」

「それは定期テストをサボったから。本来貴方は入学の時にSランクに格付けされている。」

「俺の事も調べたのかよ。」

「当然、奴隷のことは隅々まで調べるもんなの。」

暫く言い争ったが、キンジは観念した。これ以上居られると身が持

たなくなると考えたからだ。それに、彼の持つヒステリアモードの事まで深く突っ込まれそうになったからでもある。

「分かった。一件だけだ。強襲科に戻って、一件だけお前と共に事件を解決してやる。」

アリアは少し考えた風な表情になるが

「いいわ。私にも時間が無いんだし、その一件でアンタの実力をハッキリと見極める。」

「その代わり、どんな小さい事件でも一件だぞ。」

「その代わり、どんな大きな事件でも一件よ。」

「ああ、分かった。」

「手抜きでやったら風穴開けるわよ。」

「勿論だ。全力でやるよ。」

通常モードのキンジでな。

武偵殺し2

キンジは、特に用が無い日は7時58分の武偵高行きのバスに乗っていく。そして、この日は早く起きたので暫くパソコンをしていた。

「アリアと明は先に行ってくれたし、のんびり出来るな。」

朝なのにキンジは余裕だった。そして、7時50分に部屋を出て、1分後に男子寮から出たのだ。すると、目の前に武偵高行きのバスが通り過ぎていくのを見つける。

「な！？可笑しいな。」

時計は7時51分。この時間にここを通過していくバスは考えられないので、7時58分のバスが通過したことになる。

「腕時計が狂っているのかよ。」

仕方が無しに、キンジは歩いて武偵高まで行くことになった。完全に、一時間目には間に合わない。

- バス -

「キンジは遅刻か。」

「単位は落とされるね。」

武藤と不知火はキンジが乗っていないのを見て言う。そこへ、一年

の女子武偵の携帯が鳴った。

「あ、すみません。でも可笑しいな、ちゃんと電源は切ったはずなんだけど。」

取り出して、携帯を開いたら

「このバスには爆弾が仕掛けられているでやがります。」

変な発音とこの決まり文句。即座に全員が武偵殺しが出たと悟った。

「スピードを落とすと、爆発するでやがります。」

武藤は急いで運転席の所に行き

「運転手、聞いたとおりだ。絶対にスピードを落とすなよ。」

「ほ、本当に爆弾なんですか？」

運転手は怯えきっている。一般人だから無理もないと言えば無理もないが。

「ああ、俺の友達^{ダチ}ん時も同じだったって言うから。間違いない。」

不知火をはじめ、バスの中に居る者は座席や荷台などを入念にチェックするが、爆弾らしき物は見当たらない。

「駄目だ、車内にある可能性は低いな。」

不知火はそう言い、探すのを諦める。

その頃、キンジは武偵高に向かう道を歩いていた。覚悟を決め、一時間目をサボる事にした。

「来年、転校のための単位に傷が付かなきゃいいが。」

そんな独り言を言っていると、携帯に電話が入った。

「はい？」

「キンジ！、帯銃はしている？」

「い、一応は。」

「なら、その女子寮の屋上にC装備で来なさい。訳は後で話す。」

言われるがままに、キンジは女子寮にこっそり入り、屋上を目指した。この時間は寮には誰も居ないが、体面を気にしてこっそり入ったのだ。

屋上ではアリアが無線機で怒鳴っている。キンジはアリアが転校生なのに使える駒の事をよく知っているのに驚いた。

「レキ、お前も呼ばれていたのか？」

狙撃科のレキはヘッドホンをしているのでキンジの声が耳に入らない。キンジは、レキのヘッドホンの右耳の部分を軽く数回叩いた。

レキはそれに気づき、ヘッドホンを外してキンジに向き直った。

「お前も呼ばれたんだな？」

レキはコクリと頷く。

「そうか。事情は聞いているか？」

「いいえ。」

そこへ、アリアが無線機の電源を切ってこちらに来た。

「時間切れね。もう一人Sランクが欲しかったけど、皆は他の仕事で出計らっている。この4人で遣るしかないわ。」

「よ、4人って、3人しか居ないぞ。それに、一体どうしたんだよ？」

「武偵殺しが現れたのよ。バスに爆弾が仕掛けられ、スピードを落とすと爆発するそうよ。」

（ま、まるで映画のスピードじゃないか）

キンジはそう感じた。そこへ、迷彩塗装のUH60が到着した。UH60は、アメリカが開発した軍用ヘリで、近年は旧式化し始め、武偵高などの各国の専門機関に中古機として売買されている。

「おい、頼まれていたヘリを持ってきたぞ。」

操縦席から明は顔を出し、ゆっくり降下してくる。

（二、こんな物まで用意しているのかよ。）

着陸し、アリア、キンジ、レキは黒鷲ブラックホークに乗った。

「行くぞ。」

上昇させ、爆弾を仕掛けられたバスの追跡を開始する。高度1500mまで上昇させ、学園島の全体を見渡せる位置に着き、バスを探した。

「見当たらないな。」

探す、バスらしき物は見当たらない。そこへ

「8時の方向にバスを確認しました。ホテルを右に曲がっています。」

レキが突然言ってきた。明も機体を旋回させ、ホテルを目指して飛行する。

「見えた。」

レキの言うとおり、ホテルを曲がったバスを捉えた。後は近づき、なんとかバスの爆弾を解体、最悪は取り外して爆発させる。

「一気に行くぞ!!。」

ヘリとは思えないアクロバティックな軌道を行い、ピッタリとバスの真上に着けた。

「キンジ、行くわよ!。」

アリアはヘリのドアを開け、フックを引っ掛けて言った。キンジもフックを引っ掛け、ヘリはバスに少しずつ降下していく。

「低空をこんなスピードで。」

低空はヘリの下降気流によって非常に安定しにくいのだ。だから、低空を操縦にはかなりの技量が問われる。明も何とか安定させているが、実際はかなり危険な行為でもある。

「もう少しがんばってよ。あんたがミスると私たちだけでなく、バスの乗客も巻き込むのよ。」

「分かってる。」

何とかアリアとキンジをバスの天井に乗せ、ヘリは上昇する。

「バス」

キンジは窓を叩き、生徒に窓を開けてもらって中に入れた。

「皆、無事か?」

キンジは車内の無事を確認する。幸い、爆弾を仕掛けられた事と精神的なショックを受けた者が居ないのは幸いだった。普通の一般乗客ならこうもいかないだろう。車内で大パニックが起こり、怪我人などが居ても不思議じゃないくらいである。

「武藤、爆弾の方は？」

「車内はある程度調べた。後は車外か、！！ 危ない！！」

突然、横に並んだ外車からウージーサブマシンガンが現れ、バスに銃弾を連射する。

「きゃあああ！！」

車内は銃弾が飛んできてパニックが起こる。制服は防弾性だから怪我はしない。しかし、当たればかなりの衝撃とショックが襲うので絶対安全とは言い難い。防弾チョッキなども、銃弾による怪我を防ぐために作られており、銃弾が当たったときの衝撃などを吸収する素材は使われていないのだ。

「畜生。」

武藤は急いで運転席に向かった。見ると、運転手は銃弾を受けたのか気を失っている。

「武藤、お前って運転できるのか？」

「なめんなよ。こちら、車両科の優等生だぞ。ただ、最近暴走したせいで点数が残り2点しか無いんだ。」

「安心しろ、このバスは既に幾つもの交通違反を犯している。よかつたな武藤。晴れて、免停だぞ。」

「く、この馬鹿キンジ。降りやがれ、このバスで思いっきりひき殺

してやる。」

外車は一旦離れていて、近づいてくる気配は無い。そこへ、バスの下を探していたアリアが

「キンジ、見つけたわ。C4爆弾よ。」

「何!？」

アメリカ製の高性能爆弾がこのバスに仕掛けられている。

「戦車でも吹っ飛ぶわね、この爆薬の量は。」

「せ、戦車でもつて。」

「ええ、このバスは一瞬で粉々に出来る程の爆薬よ。証拠は一切残らない。武偵殺しの考えそうな事よ。」

そこへ、不知火が。

「遠山君、バスの天井に何か無かったかい？」

「え？」

「恐らくは、今も武偵殺しは僕たちを監視している。このバスに、恐らくは情報を発信する発信機みたいなものがある筈だ。そして、それを設置するのに最適な場所は天井しかない。」

不知火に言われ、キンジは天井に上る。丁度、トンネルに差し掛かったときだった。

（まずいな。このトンネルは東京都内に直結だ。もし、都内で爆発が起こればそれだけで大パニックだ。東京は、それだけで壊滅的打撃を受けかねない。）

首都東京は大勢の人間が居り、もしそんな所で爆発すれば皆が必死で、一斉に逃げ惑う。パニックの時、人間は他人を構っていられなくなる。だから、他の者がどうなるうとも自分は生き残ろうとするのだ。

「キンジ、戻りなさい!。」

突然、アリアが言ってきた。

「待ってくれ、発信機がある。これを壊さなきゃ、情報が漏れる。」

「そんなのは私が遣るから、あんたはバスに戻りなさい。」

すると、ウージーを出した外車が再び発砲してきた。

「危ない!!!」

アリアは急いで昇り、キンジを庇う様に前に出る。キンジは、自分に向かってくる弾丸にどうする事も出来ずに立ち尽くしている。

「く。」

アリアは防弾制服に銃弾を受けたが、跳弾で額を掠め、血が出る。続いて、ショックで気を失う。

「アリア！、アリア！！。」

キンジは呼びかけるが、気を失ったままだ。そこへ、無線から

「キンジ、伏せろ！！」

突然の轟音。キンジは慌てて頭を下げ、一体何が起こったのか確認する。

「車が。」

先ほど、ウージーを付けていた外車は爆発し、炎上しながら横転していた。キンジはトンネルの出口の方を見る。

「明。」

UH60の操縦席の窓に固定されているPSG1が見えた。あれで燃料タンクを撃ち抜き、満載しているガソリンに引火させたのだ。

「キンジ、無事か？」

「アリアが、怪我を。」

「分かった。待ってる。」

ヘリを上昇させ、バスがトンネルを出た。

「レキ、準備はいいか？」

「はい。」

レキはヘリの右ドアを開け、うつ伏せの狙撃姿勢を取っている。うつ伏せになることで、狙撃手は手振れを軽減させ、命中率を高められるのだ。それに、敵からの発見確率は下げる事が出来る。

「また低空か。」

降下させ、一旦海面ギリギリを飛行する。そして、バスに速度を合わせて安定させた。

「海面だから余計に安定が難しい。」

路面と違い、海面では気流の乱れもあつて安定させるのはもはや神業の域である。狙撃手はほんの少しの揺れでも目標を外す事があるから、安定させて遣らねばならない。

「私は、一発の銃弾。」

ようやく安定させたところでレキが自己暗示とも取れる言葉を言う。自己暗示とは、己に催眠術に似た呪文を掛け、力や技術を一時的にある程度まで高める事が出来る。しかし、これに頼りすぎると常に暗示が掛かった状態になってしまい、色々と体にも悪影響を及ぼすので本当に必要なとき意外は使用してはならないのだ。

「銃弾は人の心を持たない。故に何も考えない。ただ、目標に向かって飛ぶだけ。」

ドラグノフの引き金を引き、一発の銃弾が放たれた。その銃弾は、橋げたを越え、バスの下部に仕掛けられた爆弾の吸引部分に命中し、

爆弾をバスから引き剥がす事に成功する。その爆弾は、転がって橋から落ち、東京湾の海中で爆発。盛大に水柱を作って収まった。

「ふう。」

明は上昇し、バスの隣にヘリを着陸させた。

「明、アリアと運転手を至急病院に運んでくれ。」

キンジが慌ててアリアを運んできた。武藤と不知火は運転手をヘリに乗せた。

「キンジは？」

「後で行く。事故処理を終えたら行くってアリアに伝えてくれ。」

キンジはそう言ってバスの方に走っていった。レキはヘリにまだ乗っているの、仕方なく明は降りるように進める。

「私はお見舞いにも行くのでこのままでいいです。」

「そ、そうか。」

以外だった。感情が無いって聞かされていたから、まさかこんな事を言い出すとは。

「じゃあ、上昇させるぞ。」

エンジンを掛け、東京の武偵病院に向かった。武偵病院とは、武偵が基本的に入院する事からそう呼ばれているだけで、実際は一般患

者も多数入院している。

間話

- 東京武偵病院 -

キンジ、事故処理を終えて武偵病院へアリアのお見舞いに來ていた。

「これって。」

病室の入り口に花が立てかけられている。その花に添えられているカードには『レキ』よりと書かれている。

（い、意外だな。あの感情が丸つきり見えないレキが花を持ってくるなんて。）

そう思い、扉をノックする。

「ちょ、ちよつと待つてなさい。」

アリアは慌てて銃弾の擦れた痕のあるおでこを隠し、入室を許可する。

「キ、キンジ。」

「大丈夫なのかよ?」

「へ、平気よ。ちよつと擦れただけだから。医者は大げさなのよ。まあ、安心して、明日には退院できるから。」

隣では椅子に座って本を読んでいる明が居る。

「まあいい。これが事故の報告書だ。あのあと、武偵殺しが潜伏していたと思えるホテルの部屋が見つかり、鑑識科などが調査を行ったが、結局は何にも出てこなかったよ。バスの方も同様だ。」

「でしょうね。武偵殺しは考えている以上に狡猾な奴よ。そう簡単に自分に繋がる証拠を残すはずが無い。」

そう言っ、受け取った報告書をゴミ箱に投げ入れる。

「お、おい！！。せっかく仲間。」

しかし、キンジは最後まで言えなかった。ベッドを挟んで反対側に居たはずの明が目にも止まらぬ速さでキンジの後ろに回り込み、デザートイーグルを後頭部に突きつけている。

「な！？。」

「病室では静かに。大声出すと、他の患者にも迷惑が掛かる。」

そう言っ、明はデザートイーグルをホルスターに戻した。

「アリアも少し失礼だぞ。せっかく仲間が苦労して書いた報告書を捨てるなんて。」

「わ、悪かったわね。」

アリアは捨てた報告書を取り出し、読み始める。しかし、やはり満

足した成果は得られなかった。

「それじゃあ。俺は寮に戻るよ。」

キンジは戻ろうとすると

「明、貴方も戻っていいわよ。へりも返さなきゃいけないでしょう。」

「そ、そうだけど。大丈夫なのか？」

「言っただしょ。私は大丈夫。それよりも、さっき話したことは忘れないでよ。」

「あ、ああ。」

そう言っ明も病室を出た。

「キンジ、へりを返さなきゃいけないから武偵高校まで行くけど、乗ってくか？」

「ああ。助かる。」

キンジはお言葉に甘えさせて貰う事にした。

「明、さっきアリアの言っていた事って？」

「一度、ロンドンへ戻る。」

さりげなく、言った。

「え？でも。」

「一度、心を落ち着ける意味でもアリアは帰国を決めたんだ。それに、ロンドン武偵局の連中も、虎の子のアリアを失いたくはないんだろう。なんと、局長直々に帰還命令を送ってきた。」

「じゃあ、お前も。」

「ロンドン武偵局所属じゃないが、一応アリアと契約しているからな。帰るよ。」

外は都心の明かりで綺麗だった。しかし、東京湾に出ると真っ暗だ。武偵高校のあるメガフロートは一応学園都市なので明かりは少ない。

「ヘリポートだな。夜間着陸が一番難しいが、まあリラックスしていてくれ。」

UH-60はゆっくりと降下していき、車輪を地面に接地させる。

「着陸完了。」

エンジンをカットし、二人は機体から降りた。

「それじゃあ、報告書を書かないといけないから後で。」

「ああ。」

- キンジの部屋 -

明は空き部屋の一つを使っているが、殆ど私物は無い。あるとしたら、中央に飾られている二本の刀。形状から日本刀だと思う。

「恐ろしい物を持ち込むな。」

まあ、帯銃やらしなきゃいけない高校の生徒がそんな事を言えた義理ではないが。

「明日、来いって。理子の奴、一体何なんだよ。」

土曜日に突然の理子からの呼び出し。同じ探偵科で、情報収集能力に関しては情報科以外では一、二を争う腕の持ち主だ。そんな理子からの呼び出し。恐らくは、前回頼んだ追加の情報だろうと考えた。

「しかし、何でこんな所が落ち合う場所なんだ。」

カラオケで落ち合うなど、正直キンジは気が進まない。しかし、理子が落ち合う場所を変更するとも限らない。だから、行くしかないのだ。

「損だな。俺は。」

そう言っつて、ベッドに入って眠った。

武偵殺しの正体

―新宿―

「下手な尾行。尻尾がちよろちよと見えてるわよ。」

理子の呼び出しまでまだ時間があつたが、早めに東京の都心の方に来ていたキンジは途中でアリアと明を見つけて新宿まで尾行してきた。そして、見つかった。

「気づいてたんなら言えよ。」

物陰から出てアリアに言う。

「言おうか言わまいか迷ってたの。でも、ここまで来たんだし、いいわ。ついてきて。」

（警察署？）

アリアと明が入ったのは新宿警察署だった。

―新宿警察署 面会室―

入り口で銃などの武器を預け、3人は面会室に入った。

そして、警察に引っ張って来られたのは

「ママ!!」

（こ、この人がアリアの母親。）

薄紅色の髪と赤紫の瞳、アリアと殆どそっくりだった。

「アリア、そちらの人は彼氏さん？」

アリアはキンジを見て言った。それを聞いてアリアの顔は一瞬で真っ赤になり

「ち、違うわよママ。こ、こいつは遠山キンジ。武偵高の生徒で、そ、そんなじゃ無い。」

「キンジさん、初めまして。私はアリアの母親の神崎かなえと申します。」

「あ、どうも。」

「娘がお世話になってます。」

「いえ。」

「明さんも久しぶりです。アリアの近くにいていただいて、感謝します。」

「恐縮です。」

「ママ、時間がないから手短に話すわ。」

そしてアリアは武偵殺しによるバスジャックやチャリジャック。そ

して自らの決意を話す。

「アリア、気持ちは嬉しいけど、まだイ・ウーに挑むのは早いわ。パートナーは見つかったの？」

「それは・・・どうしても見つからないの。明は直接的な対決を避けるから、私についてこれる人は居ないの。」

明も俯き加減になる。彼は接近戦もある程度までなら熟せるが、本職は狙撃手。接近戦はどうしても避けたい。

「駄目よアリア。あなたの才能は遺伝性のものなの。決して後天性のものではないわ。」

「分かってるわ。優秀なパートナーが居なければ、私の力は半分も発揮できない。それは曾おじい様の例で分かるでしょう。」

シャーロック・ホームズにもジョン・H・ワトソンという優秀なパートナーであり、友人がいた。

「人生はゆっくりと歩きなさい。早く歩けば転んでしまう。」

『神崎、時間だ。』

と、見張りの看守が声を掛けてきた。

「ママ、待っててね。最高裁までに絶対に残りの冤罪も晴らすから。」

「駄目よアリア、まずは落ち着いてパートナーを探すの。弁護士が

必死に最高裁の日付を先延ばしにしているから。その額の傷は、あなたが一人では解決できない問題に取り組みすぎたからよ。」

そう言ったのを最後に、看守に連れられて面会室から出て行った。

帰り道、アリアは泣き続けた。幸い、雨にの為に涙は目立たなかったが。

「なあ、明。」

「何？」

「アリアの母親って。」

「武偵殺しを含む多数の冤罪で逮捕された。裁判は早かったよ。下級裁隔意制度の適応でな。」

下級裁隔意制度。近年増加傾向にある犯罪のお陰で、これまでの裁判遅延が他の裁判に影響して迅速に裁くことが出来なかった。その為、証拠が確りとしているものは高裁までを迅速に執り行う制度の事だ。

—カラオケ—

指定された時間になり、呼び出された個室へと入った。

「キー君!!」

と、相変わらずのロリータ服で出迎えた理子はキンジをソファーへと案内する。

「お前、授業サボっているかと思いきや、こんな所にいたのかよ。」

「くふふ、そんな事よりも。」

そう言って置かれていたモンブランを掬い、キンジの口に寄せる。

「はい、あーん。」

「あーんじゃない。」

「武偵殺し。」

「な!?!」

「あーんしてくれたら、教えてあげてもいいわよ。」

キンジは仕方なく理子の掬ったモンブランを食べる。

「おら、したんだから話せよ。」

「もー、せっかちさんなんだから。」

「煩せえ。」

理子は胸から一枚の紙をだし

「可能性事件って知ってる？事故に見せかけられた殺人。」

「どついう事だ？」

理子が出した紙をキンジに見せる。それは、キンジが武偵をやめようと思ったきつかけとなった事件。兄を失った事件。2008年1月24日、浦賀沖海難事故の調査書だった。

「この名前、お兄さんでしょう？」

死亡者リストにただ一人載る名。遠山金一。紛れもなく、キンジの兄の名だった。

「いい、いいよその眼。理子、ゾクゾクしちゃう。」

その時、キンジも

（まずい、なっちまう。）

遅かった。完全に、ヒステリアモードになってしまっていた。

「ごめんな、そろそろお家でお寝んねの時間だ。」

そう言って走り出した。

（俺の推理が正しければ、アリアが危ない。）

急いで、明にこの間言われていた帰国空港。羽田国際空港へと向か

った。

―羽田国際空港―

（ヒステリアモードのお陰で頭の中のものを整理し、推理して分かった。武偵殺しは最初はジャックで殺そうとする。しかし、最後は直接対決。そして、かなえさんへの冤罪。あれは、武偵殺しからアリアへの宣戦布告だったんだ。）

武偵手帳を見せ、アリアの乗っている飛行機に乗り込むことが出来たキンジは客室乗務員に

「武偵だ。直ぐに飛行機の離陸を中止しろ。」

「お、お客様。どのような」

「説明している暇はない。とにかく、急いでこの飛行機の離陸を止めるんだ。」

キンジの迫力に負け、乗務員は急いで階段を上って行った。

「ふう。」

キンジは機体の壁に背を預けるが、突然機体が動き出した。

「な、動いてる？」

先ほどの乗務員が戻ってきて

「申し訳ありません。機長がこのタイミングで止めるわけにはいかないんです。」

離陸直前の機体を止めると、他の機にも影響が出るため、離陸間際の機体はエンジンから不審煙が出ているなどの機体の安全運用上やむを得ない理由が無い限り止めるわけにはいかない。

（くそ、作戦を変えるしかないか。）

キンジはそう考え

「すみません。神崎・H・アリアの客室は何处ですか？」

ボーイング787-950。最近就航を始めた最新鋭のジェット旅客機だ。まだ少数しか生産されておらず、セレブ御用達用に1機だけ日本航空が購入した。機内には小規模だが娯楽施設もある。それに、客室は全て個室。正に、セレブが乗る専用機だ。

「き、キンジ!？」

「よ。」

「よ、じゃないわよ。何しに来たのよ？」

「太陽はなぜ昇る？月はなぜ輝く？」

アリアがキンジの部屋に押しかけた時に言った言葉をそっくりと返した。

「う、うるさい。風穴開けるわよ。」

「まあ、待てよアリア。キンジはここまで来なければいけない理由があったんだ。訳は聞いてやるべきだぞ。」

明は壁に背中を預け、M82を床に立てかけて座っていた。PSG1はマガジンが抜かれて壁に掛けられている。

「来るとは思っていたよ、キンジ。」

「そこまで分かっていたのか。」

訳を話そうとしたが、雷が鳴ってアリアはパニックになり、キンジは宥める。ようやく、アリアが落ち着いたところで

「アリア、この機には。」

すると、突然銃声が数回鳴ったかと思いきや、アナウンスが流れ始める。

『アテンションブリーズで、やがります。当機は只今、ハイジャックされました。』

その瞬間、3人は銃を取り

「このしゃべり方は。」

『乗客どもは大人しくし、やがれです。但し、武偵は例外でやがります。勝負してほしくは、一階のバーに来るでやがります。』

「やっぱり出やがったか。」

キンジは拳銃を抜き、扉の外を確認する。

「キンジ、僕は操縦室に行ってくる。恐らく、さっきの銃声は操縦手に向かって放たれたんだと思う。最悪、操縦するしなくなるだろう。」

「飛ばせるのか？」

「あいにく、軍の中型機しか操縦した事がなくてね。大型機なんて飛ばしたことはないよ。」

「じゃあ。」

「武偵殺しを頼む。近接戦闘はの中で一番乏しい僕が操縦を担当するのは当然だろ。」

「分かった。」

そう言い、キンジとアリアは一階のバーへ。明が操縦室へと向かった。

「アリア、今回の武偵殺しの狙いはお前だ。」

「根拠は？」

「お前の母親、神崎かなえさんに罪を着せた。これは、お前への宣戦布告だ。そして、最初のチャリジャック、次のバスジャック。そ

して今回のハイジャック。前回の手口は似ていて、今回も電波が傍受されていない。」

「どういう事？」

「奴は、直接対決でお前を片づける積りなんだよ。」

と、バーの入り口まで来ると、奥に人影が見える。

「行くぞ。」

「うん。」

銃を構え、一気に距離を詰めて二人で頭に銃を向ける。

「お、お前は！！」

先ほどの客室乗務員だった。

「今回も、きれいに引つかかってくれやがりますね。」

そう言って立ち上がり、変装用のマスクと服を破り捨てる。

「はいキー君。また会ったわね。」

「り、理子！？」

武偵殺しの正体は理子だった。

武偵殺し 3

ーボーイング787-950 機内ー

「Bonsoir^{こんばんわ}キンジ。そして、Holmes^{オルメス}。」

スチュワートの制服を破り、姿を現した武偵殺しこと理子は、キンジとアリアに挨拶をする。

（オルメス？）

キンジはオルメスと言う単語に反応してアリアを見る。アリアは

「あ、あんた。何者？」

驚愕の目で理子を見ている

「理子・峰・リヨパン4世。それが、理子の真名^{まな}。」

「リヨ、リヨパン！！」

「そう、フランスの大怪盗。アルセーヌ・リヨパン。理子はその曾孫。」

アルセーヌ・リヨパン。アルセーヌ・ルパンとも紹介されているが現在の慣習ではリヨパンとカタカナ読みされている。小説では1874年から1923年まで生きたとされている。ちなみに、有名なキャラクター、ルパン三世はアルセーヌ・ルパンの孫と言う設定になっている。

「でも、家の皆は私の事を理子なんて呼んでくれない。皆4世、4世って！！。使用人どもまでも、そう呼ぶ。」

「それが何？4世の何が悪いっていうのよ？」

理子は表情を怒りに変え

「悪いに決まっているだろう！！私は数字か？ただの遺伝子か？私は理子だ！！数字じゃない。」

その言葉を聞いて、アリアとキンジは多少なりとも同情の念を持つ。名前があるのに、数字で呼ばれば、誰でも不快に感じるだろう。

「曾おじい様を越えなくては、私は一生私じゃない。だから、イ・ウーに入った！！そして、力を得た。」

「ちょっと待て。」

そこで、キンジは止めた

「何を言っているのか分からない。オルメスって、イ・ウーって何だよ！？武偵殺しは本当にお前の仕業なのか？」

「武偵殺し？ああ、あれはプロローグを兼ねたお遊び。本命はオルメス4世、お前だ。」

「な、何で私なのよ？」

「1906年～1908年。数度の戦いで曾おじい様同士は引き分

けた。つまり、オルメス4世を倒すことが出来れば、私は曾おじい様を越えたと証明できる。」

理子は普段の顔に戻り。

「キンジも自分の役割を果たしてもらわないと。オルメス家は優秀なパートナーが居なければ力を発揮出来ない。だから、条件を合わせるためにお前らをくっ付けた。」

「俺とアリアを、お前が？」

「そう。でも、色々と大変だったのよ。キンジ、理子の予想通りに動いてくれないんだもん。この舞台を用意するのは苦労したわよ。」

理子はそこまで話すと、思い出したように

「あ、そうそう。キンジのお兄さんの事件の犯人は理子です。」

「に、兄さんを。お前が？」

「いいこと教えてあげる。あなたのお兄さんね、今は理子の恋人だよ。」

それを聞き、キンジは愛用のシルバーモデルベレッタ。通称、キンジモデルを理子に向ける。

「いい加減にしろ！！。」

「ちょ、キンジ。落ち着いて。」

「これが落ち着いていられるか。」

その瞬間、機が思いつきり揺れる。

―操縦室―

「何故だ？何故突然、コントロールが利かなくなった？」

今まで、安全に飛行できていたのに、突然コントロールが利かなくなったかと思えば軽くバンクを振った。

「一体どうして？」

しかし、窓や計器から目を離すわけにはいかない。高度は巡航高度よりも遥か下。油断すれば、墜落する。

「キンジ、アリア。早く仕留めてくれ。」

「そこまでだ理子。」

何とか体制を立て直し、格闘戦をして追い詰めれた。

「惜しいよね、あなたの二つ名『双剣双銃^{カトラ}』。私も同じ二つ名を持つているんだよね。『双剣双銃^{カトラ}』の理子って。」

その瞬間、髪がまるで意志を持っているかのように動き、死角からナイフを抜いてアリアを切りつけた。

頭を切り付け、出血をしながら倒れたアリアをキンジは何とか拾い上げて客室へと続く階段を昇る。

「百年。百年でこんなに変わるものよ、曾おじい様。」

そういい、ゆつくりと追いかけてくる。

―アリアの客室―

『それで、アリアは怪我をし、意識を失ったと。』

機内電話で操縦室と繋ぎ、明と会話している。

「そつだ。出血は収まったが、意識が戻らん。」

『ラッツォを打て。アレルギーは無いから心配ない。』

「わ、分かった。」

そう言い、キンジは武偵手帳からラッツォ。一種の蘇生薬を取り出す。

「いいか、アリア。これは不可抗力だからな。」

そう言つて制服のボタンを外し、素肌を曝け出す。

（ああ、畜生。こんな時に不謹慎だな。）

そう言い、

「行くぞアリア。動くなよ。」

ラッツォを打ち込んだ。

――操縦室――

「くそ。」

エンジンの出力が上がらず、上昇が出来ない。

「このままじゃあ、滑空状態になるな。」

エンジンの出力が上がらずにこの高度に留まるとエンジン停止の危険もある。かと言って、危険な降下もしたくない。

「早く、どっかに着陸しないと。」

そこへ、警報が鳴り響いた。

「み、ミサイルロックー!」

この機は最新鋭。民間機にもミサイル・アラートなどの警報装置が最近装備され始め、チャフなども装備されている。

「チャフが。」

しかし、この機は何者か。恐らくは武偵殺しこと理子によってチャ

フが全て投下されていた。

「くそ。」

民間機でミサイルを避けるなど不可能。運動能力に差がありすぎて、ミサイルを振り切る事などできない。

「仕方が無い。燃料は十分だが、内側のエンジンを停止させるか。」

ミサイルがどんなタイプか不明だが、旧式の熱追尾式のミサイルならエンジンを止めていれば外れることもある。だから、エンジンを止め、両片発飛行を始めた。

「燃料供給も少なくし、失速しないギリギリで飛行しよう。」

――アリアの部屋――

「バッドのお時間ですよ。キンジ、アリア。」

理子がアリアの個室に入り、辺りを見回す。

「キンジだけ？アリアは？」

部屋で見える位置にはキンジしか居ない。そして、理子はキンジがあのモードになっていると気付く。

「さあな？」

ベッドの膨らみに理子が気付き、そちらにも拳銃を向ける。

「へえ、そこか。」

それを見たキンジは、ベッドの中にある酸素ボンベ。機内の酸素が保てなくなった時などに排出される酸素マスク。それに直結している酸素ボンベをベッドから出した。

（撃てば爆発する。オレも、理子も。）

撃てば内部の酸素が勢いよく噴出され、それに容器が耐えることが出来ず、手榴弾の要領で破片をまき散らし、相手に怪我を負わせることが出来る。

それで怯んだ所をキンジ間合いを詰めに行く。しかし、理子の銃から銃弾が放たれた。

（ああ、駄目だなこりゃ。右にも、左に行っても避けられねえ。だつたら。）

紅い、ナイフを取り出し、銃弾の先に出す。その刃で、銃弾を切断。弾道を逸らした。

「くふ、アリアを撃つよ。」

そう言つてバスルームの方に銃を向けたその時、荷物台に隠れていたアリアが飛び出し、ガバメントで理子の銃を吹き飛ばす。

「っち。」

そう言つたのも束の間。アリアはキンジにガバメントを投げ、自分

は着地と同時に刀を抜いて理子の髪を切る。

「な!？」

一瞬の出来事で反応する暇のなかった理子は呆気にとられる。

「峰・理子・リヨパン4世。殺人未遂の現行犯で逮捕するわ。」

拳銃と刀、両方で狙われた理子は残念そうな顔になる。

「へえー、最初はベッドに居ると思わせ、次にバスルーム。でも、両方とも違う。本当はアリアの体を生かしてキャビネットの中に隠したのか。凄いね。相当なチームワークが無いとできない芸当だよ。」

「不本意ながら一緒に生活している身。合わせたくなくても合わせられるよ。」

「二人とも誇っていいわよ。理子をこんなにも追い詰められたのだから。」

理子は、先ほどの残念そうな顔とは裏腹に余裕の顔を見せる。

「追い詰めるも、もう終わりよ。」

「バアーカ!!」

――操縦室――

「う、またか。」

今度は急降下している。

「こ、こんな急角度。大戦期の急降下爆撃機並みだぞ。」

急降下爆撃は60〜70度で急降下する。現在、急降下角度58度。殆ど急降下爆撃の角度と一致している。

「上がれ!!」

操縦桿を力いっぱい引くが、操縦桿は言う事を利かない。急激に高度を失っていることを示す警報が鳴り響く。

——アリアの部屋——

理子は先ほどの急降下による揺れでバランスを崩した一瞬について部屋から逃げ出した。

「アリア、お前は操縦室に行け。オレは理子を追う。」

「分かったわ。キンジ、気を付けてよ。」

「分かってるよ。」

そう言い、キンジは理子を追ってバーへ。アリアは明の居る操縦室へと向かった。

強行着陸

―バー―

「狭い機内で何処に行こうって言うんだい？子リスちゃん？」

ヒステリアモードになっているキンジは理子を追ってバーへと入った。

「それ以上近づかない方がいいわよ。」

「！！、爆弾！？」

見れば、理子を囲むように爆弾が仕掛けられている。

「ご存じの通り、私『武偵殺し』は爆弾使いなので。」

スカートの裾を掴まんで、理子は言う。

「ねえキンジ。この世の天国。イ・ウーに来ない？明の所属している、自由同盟よりもいい所だよ。」

「なあ、理子。そのイ・ウーって、何なんだ？それに、自由同盟って？」

「詳しい事は言えないな。明なら自由同盟の事位なら話すかもね。尤も、私も自由同盟については殆ど知らないの。それとも一つ。イ・ウーには、お兄さんも居るよ。」

キンジは拳銃を理子に向け。

「頼む理子。これ以上、俺を怒らせないでくれ。これ以上怒らせると、衝動的に武偵憲章9条を破ってしまう。」

「あらら、それは理子的にも困る。キンジにはこのまま武偵のまま
でいてもらいたいから。」

理子は腕を組み。

「明にでも詳しく聞いたらいいと思うわ。話すかどうかは知らないけど。それと、アリアにも伝えといて、イ・ウーは何時でも貴方たち二人を歓迎するって。」

――操縦室――

「明、さっきから何やってるのよ？」

「こっちが知りたい。突然コントロールが利かなくなるし、ミサイルロックはされるし。」

「み、ミサイルロックですって!？」

その瞬間、機体に衝撃がはしる。

「きゃ――!」

アリアはよろけたが、何とか持ち堪える。

「な、何なのよ!？」

「バーに穴が開いた。って!!、ミサイルだ!!」

「え!？」

ミサイル警報が鳴り響き、アリアは外を覗くと

「明、ミサイルが来てる!!回避して!!」

「無茶言つな、こちらら大型のジャンボだぞ。」

ミサイルは、内側のエンジン2基を破壊した。

「うわああ!!」

エンジンが吹っ飛び、機体がバランスを崩す。

「くっそ。」

明は必死に機体の態勢の立て直しを図る。運よく、機体は揺れずに飛行できるようにまで回復した。

「ちょっと悪い。操縦が変わってくれ。」

「え!？、冗談でしょ?私、セスナぐらいしか飛ばした事ないのよ。」

「いいから、ちょっと変わってくれ。」

「わ、分かったわよ。」

そう言つて、明は操縦席から離れ、無線や機体の状態をチェックする技術員席に座り、無線を弄っていると。

「アリア、明。こっちは無事だったんだな。」

キンジが戻ってきた。

「キンジ、面倒なことに内側エンジン2基が何者かのミサイルによつて吹っ飛んだ。」

「理子はイ・ウーからの贈り物つて言つてたぞ。」

「物騒な贈り物だな。」

明は皮肉を込めて言う。

「明、後で話がある。」

「やっぱり、理子から聞いたか？」

「全部じゃない。」

「そうか。」

キンジは振り向いて

「そつだ、武偵高に無線を繋げないか？」

「やってみるよ。」

明は無線機を操作して、武偵高の、出来れば通信科の通信端末機にでもアクセスできないかやってみた。

―東京武偵高校―

「現在、ハイジャックされたボーイング787-950は浦賀水道上空を高度約1000ftで飛行中。」

武偵高に残っている生徒は今回のハイジャックの報道を見て、早期に行動を起こしており、教室内にも通信科から持ってきた端末などが置かれて情報処理を行っている。

『こちら明、こちら明。武偵高、誰か聞こえるか？聞こえたら応答を。』

教室に置いてある無線端末から明の声が聞こえ、武藤は無線機のヘッドセットを装着する。

「明か。こっちは今全員集まっている。」

『そいつは有り難いね。今、キンジに変わる。』

「キンジはそこに居るのか？」

しかし、返事がなく、代わりにキンジが無線に出る。

『よう、武藤。俺って面倒事によく巻き込まれるって思ってるだろ

う?」

「そんな事よりもキンジ。そっちの状況はどうなっている?」

『エンジンが内側2基吹っ飛んだ。バランスは取れているが、どうも嫌な予感がする。』

「正解だぜキンジ。恐らくそれは燃料が漏れているからだろう。」

『何!?』

「多くの航空機は内側エンジンが破壊されると燃料が漏れだす。そのボーイング787 - 950も例外じゃない。」

『そいつは最高だ。最新鋭機になっても変わらずか。』

「キンジ、その機は飛行記録から相模湾上空をうろついている事が分かった。今は浦賀水道上空だ。最寄りの羽田へ引き返せ。」

今度はアリアが無線に割り込み

『元からその積りよ。』

――操縦室――

「明、羽田の管制塔にも繋いでくれ。」

「2つ繋ぐのかよ。錯綜しても知らんからな。」

羽田の管制塔にも無線機を繋ぎ、応答を呼びかけた。

『こちら、羽田^{タワー}管制塔。600便、現在の状況を知らせ。』

「キンジ、繋がったぞ。そっちに合わせる。」

明が無線機を操作してキンジの無線機に繋ぎ直す。

「こちら600便。離陸後にハイジャックを受け、現在犯人は機外に逃亡。その後、ミサイル攻撃で内側エンジン2基を破壊。燃料流出。」

『了解した600便。』

「管制塔^{タワー}、この機に近い性能のボーイング787-350、ボーイング777-250機の操縦キャリアの長いベテランパイロットの無線を、全て繋いでくれるか？」

『できなくもないが、どうする積りだ？』

「それで、即席の操縦マニュアルを作る。着陸するためのな。」

管制塔は直ぐに指定された機の操縦経験の長いベテランパイロットに無線を繋ぎ、それを明が処理をしてキンジの無線機に入れる。

「大方の操縦方法は分かった。」

「キンジ、お前さんは聖徳太子顔負けだな。」

聖徳太子。恐らくは日本人で名前を知らぬ者はいないだろう。彼の逸話の中で10人の人の言葉を聞き分け、的確な回答をした事は有名な話だろう。

『こちら防衛省。600便、羽田への着陸許可は出さず。空港、現在自衛隊で封鎖中。』

突然、防衛省から無線が入った。それは錯綜が良い所で出たらしい。武偵高校に居る武藤にもその無線が聞こえた。

――武偵高校――

「中空知さん。防衛省の無線機に割り込めねえか？」

中空知美咲。詳しい説明は省くが、通信科の二年生である。

『もう割り込みを開始しています。……繋がりました。』

「サンキュー。」

武藤はお礼を言い

「何言つてやがるんだ!!」

『誰だ?』

「俺は武藤剛気。武偵だ!!600便は燃料が切れかかってんだぞ。代替滑走路なんてどこにもねえ。羽田以外の着陸できる場所で600便の航続距離範囲は無い。」

『武藤武偵。私に怒鳴ってもどうする事も出来ないぞ。これは防衛大臣の命令だ。』

『武藤、もういい。それよりも、この機の着陸に必要な滑走距離は分かるか?』

「そうだな。そいつの性能はまだ非公開の部分が多すぎて断定は出来んが、残りの燃料は少なく、乗客名簿を見る限り乗客も少ない。最新の炭素繊維複合などもあつてその機体は重量が抑えられている。同性能機は無いが、大体2500m前後だろう。」

『風速は?』

「待つてろ。レキ、風速は分かるか?」

窓から外を見ているレキに武藤は尋ねる。

「私の体感で5分前は南南東41・02m。」

『風速41mに向かってどの位で着陸できる?』

「そうだな、2000m前後だと思つぜ。」

『誤差許容範囲50mだな。』

「どついつ事だ?」

『学園島は南北2?、東西500mだ。対角線を一杯に使えば2061m。』

「お、おいまさか。学園島に降りる積りじゃあ？ここは人だつて大勢いるし、建物も。」

『安心しろ。降りるのはそつちじゃなく、空き地島の方だ。』

「あそこはただの浮島。こんな夜にライトも無しで着陸は自殺行為だ。いくら機体にライトがあるとはいえ、そんな物は気休めにもならん。」

――操縦室――

「じゃあ、着陸を断念して墜落で心中するか？アリア？」

突然話を振られて、アリアは舌を出して

「誰がアンタなんかと心中するもんですか。」

「嬉しいね。初めて、アリアと意見があつたよ。俺も心中なんてお断りだ。アリアを死なせたくない。」

それを聞き、アリアは完全に顔面赤面。頭から湯気も出始めた。

「おいおい、こつちの意見は無しかよ。」

後ろで無線機を操作する明が言ってくる。

「まあ、こつちも心中なんて御免だね。」

「意見が纏まったな。」

キンジは無線機を付け直し

「そう言う訳だ武藤。当機はこれより、着陸態勢に入る。」

『待てキンジ。今日は雨で濡れている。2050じゃあ停止しないぞ。』

「何とかするよ。考えてあるしな。」

『か、勝手にしやがれ！。しくじったら轢き殺してやるよ。』

「しくじったら、生きていないよ。」

それを最後に、武藤は無線機を切った。

着陸態勢に入る。フラップとスラップを広げ、降下していく。だが、武藤の言うとおりに真っ暗で輪郭すら見えない。

「キンジ、操縦桿は預けるわ。絶対に、言葉通りに成功させて。」

アリアは操縦系統の全てをキンジに切り替え、シートベルトを締め直す。

「駄目だな。」

「え？」

「暗すぎる。分かっていたが、予想以上だ。」

「ちよっ!?!」

そこへ、明が顔を突出し

「でもお二人さん。暗さは解消しそうだよ。」

指差した先には、光が一直線に2つ延び、滑走路灯が出来上がる。

「一体、どうして?」

そこへ、武藤から無線が入った。

『聞こえるかキンジ?。お前に死なれると白、いや、泣く人が居るからよ。俺、車両科でモーターボートと車両、それに装備科の懷中電灯をみんなで無許可で持ち出したんだ。全員の反省文、お前が後で書け。』

それと幾つかの声が混じってくる。

（こいつら、俺等がバスジャックで助けた奴らじゃないか。）

「武偵憲章一条。仲間を信じ、仲間を助けよ。」

アリアが武偵憲章を言う。それが、合図かのように車輪を空き地島に着ける。

「逆噴射を掛ける。」

明が上のエンジンパネルの中にある逆噴射のスイッチを押し、推進力を相殺させる。しかし、幾ら重量が軽いとはいえジャンボジェット機。そう易々と停止しない。

「掴まれ。」

見ると、風力発電の風車が迫ってきた。

「ははは、キンジ。お前はやっぱり、最高だよ。」

明はそう言い、急いでシートに座ってベルトを締める。

左翼を風力発電の風車にぶつけ、その衝撃で一気に減速し、湾に落ちるギリギリで停止した。

この後、反省文を書かなければいけないが、校長は『仲間を守るための使用なら仕方なし』と言って反省文は免除された。

間話

―ファミレス―

「それで、理子から何を聞かされた？」

明は指定されたファミレスに入り、キンジと話していた。

「まず、何故理子が武偵殺しだと思った？」

「何の事？」

「惚けるな。あの時、俺が来るのを予測しているような言動だった。」

「理子の事を色々調べた。これ以上の詳しい事は言えない。」

キンジは注文したコーヒーを一杯飲み

「じゃあ、自由同盟って何だ？」

明は驚いた表情になり

「驚いたな、理子が自由同盟の存在を知っているとは。」

「詳しくは知らなかったようだ。」

「そうか。簡単に言えば、歴史の影に隠れ、歴史を操り、世界をあるべき世界に導く同盟みたいなものかな。その財力は一日で14京

と言う莫大な富を得て、成長し、世界を操っている。」

「そんな、恐ろしい団体なのかよ。」

「恐ろしい団体ねえ。傍から見れば確かに恐ろしいが、自由同盟が無ければ世界は衰退し、崩壊していく。考えてみる。指導者を失い、衰退を始めている国を。」

「アフリカの事か？」

「そうだ。革命で指導者を追い出したが、纏まらない政治、民衆。それを纏めているのも我々自由同盟の人間なのだよ。」

「何者なんだ？お前は？」

「自由同盟第108代目指導者。明・宮川・ラスプーチン3世。ロシア帝国崩壊の原因を作った、グリゴリー・ラスプーチンは僕のおじい様だよ。」

「ラスプーチン、第108代？」

「起源は遣唐使が派遣されている時代まで遡る。遣唐使として派遣された一団の中で強くヨーロッパへの憧れを抱いている者が居た。その者がシルクロードを通り、ヨーロッパ（当時のローマ帝国）へと渡ったのだ。そして、そこで出会ったゲルマン人（現在のドイツ周辺を当時はゲルマニアと呼ばれていた）。彼らと共に同盟を作り上げたのだ。それが、自由同盟。」

「なるほど。憧れで行った先で同盟を結成したって訳ね。」

「今では世界中に広がっている。原因は2つの世界大戦だ。」

「どうして？」

「それで、自由同盟を広げようとした者が国から帰れなくなっただよ。そこで、仕方なく広報活動続けた。結果が、世界中に広がった。勿論、殆どの者は知らないがね。」

明はキンジに説明を続けていく。しかし、キンジに信じられないのはただ一つ。どうやって、一日に14京と言う莫大な資金が手に入るかだ。ただ、突っ込まないでおこう。面倒事になるから。

—キンジの部屋—

明の説明を受け、少し頭が痛い、それでも何とか平常心を保っていられた。

「ママの公判が伸びたわ。今回の件で、武偵殺しは冤罪だって証明できたから。」

アリアが後ろから話しかけてくる。

「そうか。」

「弁護士の話では最高は年単位で延期されるそうよ。」

アリアはベランダから夜の月明かりと、空き地島にて大破している強行着陸させたボーイング787-950を見る。

「ねえ、何であんたは飛行機まで助けに来たの？私一人でも十分だったのに。」

「馬鹿のお前に、武偵殺しに勝てないと思ったんだよ。」

「馬、馬鹿に馬鹿言われたくないわよ。馬鹿キンジ！」

「そうだな。お前みたいな馬鹿を助けた俺は、もつとの馬鹿なのかもな。」

アリアはキンジを改めて見て

「御免。今の嘘。私ひとりじゃ何も出来なかった。私、空で分かったんだけど、やっぱり私にはパートナーが必要なのに。アンタが居なければ私、何も出来なかった。」

アリアは拳を握りしめ

「だから、今日はお別れを言いに来たの。」

アリアは体をキンジの方に向け

「やっぱりパートナーを探しに行く。アンタなら良かったんだけど、約束しちゃったもんね。」

「約束？」

「一回だけって言ったでしょう。」

「あ、ああ。」

「武偵憲章2条『依頼人との約束は絶対に守れ。』。だからもう追わないわよ。キンジ・・・アンタは立派な武偵よ。」

その後、最後の雑談と思って沢山会話した。

「ああ、もうこんな時間。もう行くわ。」

「どうやって帰るんだよ?」

「明がヘリとアドミラル・クズネツォフを用意してくれた。空母には艦載機のF-18が待機しているそうよ。」

「ロシアの空母にアメリカの艦載機? 一体、明って何者だよ?」

「あら、アンタに正体話したって聞いたけど。」

「スケールがデカすぎる。幾ら友好国だからって、両国が良く許したな。」

「自由同盟の援助がなきゃ、世界は成り立たないって話したでしょう?」

「あいつは世界の王かよ!?」

本部

アリアがキンジの部屋を出たところ、明は車両科からヘリを借りて太平洋上に居た。

「私だ。浮上させる。」

無線機に向かってそれを言い、上空に滞空した。すると、海中から全長4・8?もある巨大潜水艦が姿を現した。

「ハッチを開ける。」

船体上部と側面に『UX1』と書かれている。これが、自由同盟の本部である。

「こちら、リバティー・サブマリン。着陸灯を点けます。」

無線機から返信が返ってきた。ステルス性を高めるために、船体は綺麗な流線を描いた形で、上部構造物などは速力に影響するため、ハッチ内に収容している。武装は80?連装砲を前後部に1基ずつ、60?3連装砲を前後部2基ずつ。その他、ミサイルVLSやCIWS、連射砲も備えられており、船体前面と後面には魚雷発射管も備えている。

「着陸灯確認。着陸します。」

ヘリを降下させ、着陸させる。ハッチは開放すると全長4?にも及ぶ飛行甲板になる。カタパルトなしでも航空機を離発着可能なのだ。

エレベーターでへりを収容し、格納庫内で明は

「お久しぶりです総統。」

中学生くらいの少年に出迎えられた。中学生らしく見えないのは、後ろに背負ったバックパックとそこに付けられているブローニング重機関銃だ。

「武器が損傷して、現在修理中。なので、暫く使用する代わりに武器が欲しいとか。」

「そうだ。武器庫を開ける。」

「分かりました。」

武器庫を開け、中に入った。中には年代物のマスケット銃や火縄銃。ギャグとしか思えない湾曲付属品を付けたMP43や44まで、世界中の銃火器が揃えられている。

「狙撃銃、狙撃銃。」

明は狙撃銃の所まで行き、品選びをする。

「そういえば総統、ボルトアクション式のは使ったことがありますね。」

「どうもあれは苦手だね。一回一回スコープから目を外して装填しなきゃいかんのが面倒だな。」

そう言つて、SR-25シールズモデルとツアスタバM76北朝鮮

モデルを取る。

「M82はいいんですか？PSG-1はありませんが、M82ならあそこにありますよ。」

指差した先にはM82が10丁ほど立て掛けられている。

「いいんだ。」

そう言つて、赤外線・暗視スコープや生体反応チップ、銃剣と∞型マガジンを取る。

「弾は？」

「十分ですよ。」

「そうか。」

そう言つて、的を狙い、一発ずつ試射をした。

「確かに、弾も十分だ。精度も。」

ど真ん中に弾丸が命中しており、精度は十分と判断した。

「ところで、何故この艦は潜航している？」

「海自がこちら辺を警戒しているのです。ステルス性が高いので、本艦が発見されることはありませんが、万が一見つかつて爆沈なんかしたら世界が終わりますので。」

「攻撃はされんと思うぞ。それと、私はそろそろ戻る。長い時間、洋上に居るわけにもいかんからな。」

「了解しました。」

中学生らしき少年は、艦内マイクを取り

「艦長命令を伝える。本艦はこれより浮上する。メン・イン・タンクブロー。」

その中学生の少年は艦長と名乗った。

「なかなか、様になっているじゃないか。ヴォレス大佐。」

「はい。そうそう、ヤーベル海軍大將から伝言を預かっています。『総統、無茶をなさらないで下さい。ここ5年の内に既に4人も総統が亡くなっております。これ以上、総統が亡くなられては自由同盟の尊厳が無くなってしまいます。』だそうですが。」

「全く、ヤーベルは心配性だ。そう簡単にくたばって堪るかよ、つと伝えとけ。」

「それと、レーダーが昨晚に不思議な影を捉えました。推進音から潜水艦だと思われるのですが、どの艦型か一切不明なんです。」

「データに無いのか？世界中の記録などが入っている800兆TBのコンピューターに入ってなかったのか？」

「はい。」

「分かった。その件はもういい。私は戻る。」

飛行甲板に上がられたヘリに乗り、エンジンを掛ける。

「総統、お気おつけて。」

「ああ。」

ヘリを上昇させ、武偵高校に帰り、ヘリを返してキンジの部屋に戻ったら

—キンジの部屋—

「な、何があったんだ？」

部屋の中は台風が過ぎ去ったみたいにグチャグチャ。あらゆる物が切り裂かれ、壊され、穴が開いている。

「あ、明。」

「な！？アリア、お前帰ったんじゃない。」

明は部屋にアリアが居る事に驚く。そして、もっと驚いたのが。

「タアアア！！！」

いきなり切りかかってくる黒髪ロングヘアの巫女装束をした武偵校生だった。

「ええ!？」

刀を抜いて何とか抑えられた。

「き、キンジ。これは一体？」

「キンちゃん。この子誰？キンちゃんのルームメイトじゃ無いでしょう?」

「だから、いきなり切りかかってきて、ルームメイトだの何だの、話が見えない。まずは、この状況を説明してくれ。」

その巫女は、刀を払って後退する。

「私はSSRの星伽白雪。」

「S、SSR!!。って事は、超偵か。」

「そういう貴方こそ何者？アリアは分かるけど、貴方の事は何も知らない。」

「狙、狙撃科の宮川明。」

「なんでこの部屋に来るの!？」

「いや、その、何と言つか。」

「キンジは私の奴隷よ!!。」

(アリア、頼むから話をややこしくしないでくれ。)

キンジと明はそう思う。白雪は赤面し、

「そ、そんな。キンちゃんといけない遊びなんて。確かに、私もその逆を想像したことあるし。」

(あの、白雪さん。貴方は何を仰っているのでしょうか?)

キンジは白雪の言葉にドン引きしながら思う。

「でも、キンちゃんを汚した罪と恋人になった罪。死んで償え!!」

そう言って鎖鎌を2本、明とアリアに向かって投げる。

「な、恋人!? 冗談じゃない、私はキンジと恋人じゃない。」

アリアは否定する。

「なあ、何でこっちにも投げるんだ?」

明はなぜ自分に鎖鎌が飛んできたか分からない。

「アリアと関係者みたいだから。」

「そんな理由でこんな物投げたのかよ。下手すりゃ死ぬぞ。マジで。」

鎌の先端がもう少しで肉を切りそうな位置にある。

「き、キンジ。その女に確りとした説明をしなさい！」

アリアは慌ててキンジに言う。ようやく、キンジは白雪の肩を掴んで止めるのだった。

ボディーガード 1

—キンジの部屋—

「白雪、俺とアリアは武偵として一時的に組んでいるだけだ。明はアリアと契約している。ただそれだけだ。」

ようやく話を理解できるような状態に白雪は戻り、話を進める。

「じゃあ、アリアとキンちゃんはそういう関係じゃないのね。」

「そういう関係？」

「その、キス・・・とか。」

それを聞いた瞬間、アリアとキンジは固まった。そして、アリアは一瞬で顔面赤面する。

（おいおい、そんなにも仲が進展してたのかよ。）

明は二人の反応を見て驚く。一方白雪は

「した・・・のね・・・？」

ドス黒いオーラを出した。

（し、白雪さんが、黒雪さんに成っちゃった。）

再び、明は驚く。

「そ、そういう事はしたけど。でも、大丈夫だったのよ。」

アリアは慌ててその黒雪さんに対応する。

「子供は……出来ていなかったから！」

その時、時間が止まったと感じたのは、言うまでもない。黒雪は白雪に戻って卒倒。明は赤面しながらうつ伏せに倒れる。

「アリア、お前な。」

キンジは慌てて、今度はアリアに対応する。

「だってだって。キスしたら子供が出来るってお父様が。」

「出来るか!!！」

えー、細かく説明すると発禁になるので説明はしない。少なくとも、キスで子供が出来る事は無い。

「あー、キンジ。ちょっと御免。今日は、別の所で眠るわ。」

明がそう言った途端、白雪の袖から発煙グレネードが落ち、爆発する。

「うわ!」

「きゃ!」

アリアとキンジが驚いている間に、明はその発煙に紛れて部屋を出た。

― 武偵高校 ―

「今朝のホームルームは来週に迫ったアドシールドについてです。アドシールド期間中は競技に出る各国の武偵だけでなく、一般の方々も大勢来られます。」

朝のホームルームで、アドシールドについての説明を先生が始める。しかし、聞いているのは一部の生徒だけだ。

「なあキンジ。お前、アドシールドとか出ないよな？」

と、キンジの前の席、武藤が聞いてくる

「当り前だろう。Eランク武偵なんかお呼びじゃない。」

「だよな。じゃあ、俺と一緒に受け付けやろうぜ。不知火が辞退しちまってよ。」

「拳銃競技の代表に選ばれたんだ。神崎さんが辞退しちゃったから。」

と、不知火が説明する。

「ああ、受け付けなら別に構わんが。どうせ、俺はお前らと最後に

バンドをやるぐらいだし。」

最後はアル＝カタ。簡単に説明してチアリーディングの最中、男子は後ろでバンド演奏をしている。

「じゃあ決まりだな。そういや、明はどうした？あいつ、Sランク武偵だけど、狙撃競技を教務科から辞退要請を受け、代わりになんか仕事を与えられたらしいけど。」

「教務科から、仕事？」

優秀な武偵には教務科から仕事の依頼を受ける事がある。完遂すれば単位を多く貰えるが、危険な仕事が多い。

「何か聞いてないか？つとと言うか、明は何処に行ったんだよ？」

明は教室には居ない。登校したという証拠に、鞆が置かれているが、姿が見えない。

「さあ？昨日、どっか別の場所で寝るって言ってたけど。」

しかし、昼休み、キンジはアリアに呼び出されて木刀で真剣白刃取りの練習をさせられる。ちなみに、真剣白刃取りはそう簡単に出来るものではない。高速で動く、比較的細い日本刀を両手で掴み、速度を殺す事など、人がそう簡単に出来るものではない。

その日の放課後

『二年B組、星伽白雪。二年A組の宮川明。至急、マスタース教務科塔の綴の所に来るように。』

つと、校内放送が流れる。これを聞いたアリアは、キンジを連れ、ダクトの中を通っていた。

「なあ、何でこんな事すんだよ？」

「白雪あいつの弱みを握るためよ。今日、何処からともなく吹き矢が飛んで来るし、水を掛けられるし、泥棒ネコって書かれた紙が靴箱の中に在ったり、誰から見張られている気配がしたり。更には、その・身体的理由でロッカーの奥まで入り込まないと服を取れない事を見越してピアノ線が張られていた。」

「ぴ、ピアノ線って。やばいだろ。」

綴の部屋の上にあるダクトまで来た二人は、会話の盗聴を始める。

—綴の部屋—

「白雪、これはどういう事だ？お前が90点を下回るなんて。」

「す、すみません先生。」

「まあ、勉強の事はどうでもいいけどさあ。」

綴は煙草の灰を灰皿に落しながら言う。ちなみに、こんな事を先生が言うのは正直、問題発言だ。

「ねえー、単刀直入に聞くとさあ。魔剣デュランダルに接触された？」

「いえ、それはありません。第一、魔剣は存在自体あやふやで、仮に存在しても、私なんかよりももっと大物の超偵を狙うんじゃないあ。」

「あのなあ、白雪。お前は東京武偵高校うちの秘蔵っ子だぞ。もう少し自信を持て。」

「そ、そんな。」

白雪は遠慮深そうに言う。

「せめて、ボディーガードでもつけろってば。せめて、アドシアー
ド期間中だけでも。そう思って、明を呼んだんだから。」

「せ、先生。狙撃科の生徒をボディーガードにつけるのは、ちょっと。って、熱いですよ先生。」

綴は明の腕に吸っている煙草の火の着いている先端を押し付ける。

「8秒。それだけ耐えられるなら、少なくとも苦痛は大丈夫だ。そして、」

そう言っただけナイフを明の喉元目掛けて振る。しかし、まるで読んでいたかのように明はナイフ抜いて綴のナイフの軌道上に出して喰い止める。

「反射神経と近接戦闘技術も合格。狙撃科なのに近接戦闘を出来る
とは優秀だな。」

「先生、生徒ファイルを見て言わないで下さい。」

綴の机に明と白雪の経歴が書かれたファイルが置かれている。つまり、明の過去は完全に理解している。

「ははは、ロシア軍の元中尉殿は近接戦闘も優秀と来たな。」

綴は笑いながら言う。

「ろ、ロシア軍!？」

白雪は驚く。まだ高校生なのに元軍人。しかも、将校なのだから驚くのも当然だ。

ボディーガード 1（後書き）

区切りが悪いですが、ここで第一部は終了です。

ボディーガード 2

―綴の部屋―

「ついでに先生。」

明はそう言つてSR - 25をダクトに向かつて構え、乱射する。明のSR - 25には、通常の突撃銃同様に3点バーストの他フルオート機構も改造で備えられている。しかも、 ∞ 型マガジンには250発の銃弾が入れており、十分自衛戦闘が可能だった。

「いて、いてて！」

ダクトの中で盗聴している二人に明の放った銃弾が何発も命中する。

「そのダクトで聞いている人にも、ボディーガードを依頼するべきでは？どのみち、もう聞かれているし。」

アリアは仕方なくダクトの入り口を外し、降りる。

「良く分かったわね。」

「ここに来るまでに話し過ぎだし、大きく動き過ぎだ。ダクトが僅かに振動していたからな。」

声とは、簡単に言えば空気の振動なのだ。だから、空気が無い場所では音も声も伝わらない。そして、声を発すると人間には感知する

ことが出来ない僅かな振動が発生する。それが、ダクトに微妙に現れ、明がそれを見逃さなかったのだ。

まだダクトの中に居たキンジも降りてくる。

「キンちゃん、アリア!？」

白雪は驚き。

「お前ら。」

綴は呆れる。

「まあいいわ。それよりもそのボディガードは私が引き受ける。24時間体制、無償で。」

アリアは左手でグッドサインを作りながら白雪に言う。

「ほー、Sランク武偵が無償で護衛してくれるのか。そりゃあ上等だ。」

綴は勝手に話を進めていく。が、

「嫌です。アリアがいつも一緒だなんて、汚^{けがら}わしい。」

と、白雪は否定する。昨日の件があるのだから、無理もないが。

「護衛させないと。」

アリアは太腿のホルスターに収めているシルバーモデルガバメント

に手を掛ける。

「こいつを撃つわよ。」

威嚇を始めた。

「わあ、アリア、武偵法9条を。」

キンジはアリアが早まった行動に出ないように説得する。

「キンちゃん。」

つと、白雪がキンジを見る。それを見た綴は笑みを見せる。

「へー、そうか。そういう人間関係か。で、どうする？星伽。」

綴は白雪を見て言う。白雪は決心したような顔をし

「分かりました。アリア、それに明に護衛してもらいます。」

と言う。キンジは安堵の溜息をつくが、白雪はキンジを指差し

「但し、キンちゃんも私をボディガードして。24時間体制で。

私も、キンちゃんと一緒に暮らす!!」

—キンジの部屋—

武藤にトラックを運転してもらい、最低限の荷物を運び入れた白雪はキンジの部屋のキンジの前に来て正座をし挨拶をした。

挨拶は、大和撫子の名に恥じない礼儀正しい挨拶だった。その隣では、アリアが天井を改造している。そして、明は。

「ありがとうございました。」

近くのコンビニやスーパーで食材を買っている。

「全く、何でこんな事に。」

歩きながら文句を垂れる明。狙撃手は、ボディガードに向いていない。広い範囲を見張らねばならない狙撃手にとって、狭いスコープばかり覗いている事が多いので苦手である。なので、あまり使わないデザートイーグルをホルスターに収めている。

「これじゃあ、狙撃銃を取りに行った意味は特にないな。」

常備していた狙撃銃は先のハイジャック事件の着陸の際に強い衝撃を受け、現在は部屋で修理中だった。なので、代わりの狙撃銃を自由同盟本部『リバティー・サブマリン』に取りに行ったのだ。

「それに、不審な潜水艦と言うのも引つかる。」

リバティー・サブマリンの艦長であるヴォレス大佐が話していた不審な潜水艦が個人的に気になっていた。本部の音紋分析でも艦型、艦名が一切不明の謎の潜水艦。昨晚、超音波で艦形だけは分かったらしく、その写真を送ってきた。見たところ、本部程ではないが大

型であることが判明。推進音から見て原子力機関の4軸推進であることが判明している。

「海自の警戒網にも引つ掛からず、易々と突破したところから見て艦長は相当な腕だな。こちらの本部も日本近海に接近し、海底鎮座していると聞く。」

本部の巨体は日本近海に近づきすぎると座礁する恐れがある。

「ヴォレス大佐なら、そんなミスをしないだろうが、接近は極力控える様に指示してある。むやみに近づいて、攻撃されれば面倒だしな。」

海自はそう簡単に攻撃しないだろうが、その謎の潜水艦は正体が一切不明なのだ。近づいたらいきなり攻撃を受けるって事もあり得なくもない。

ボディーガード 2 (後書き)

やっぱり中御半端ですが、ここで2部は終了です。

ボディーガード 3（前書き）

いや、感想に驚きましたわ（本当に）。平賀さんのお金に対する執着心は恐ろしい。っと、言う訳で、明の交渉金は12万から50万に変更します。

ボディーガード 3

—キンジの部屋—

「あれ、キンジとアリアは？」

明が部屋に帰ったら、白雪しか居おらず、キンジとアリアは見当たらなかった。

「あ、キンちゃん様とアリアはちょっとお出掛けするって。」

「あ、そうですか。（普段は普通の大和撫子なのに。）」

明も日本人の血が半分入っているから、大和撫子がどれだけ貴重な存在か知っている。第二次大戦に敗北し、欧米の文化が流入した為に今では殆ど存在しない。出会えたら奇跡とまで言われている。

「頼まれていた食材、買ってきた？」

「あ、ああ。しかし、これで何を？」

「中華を基本にした夕食です。あ、中華料理北方系、好き？」

「た、食べられない訳ではない。」

そう言うと、白雪はキッチンの方に行った。明は料理が出来ない訳ではないが、白雪が作るのだから邪魔するのも不味いだろうと思い、テーブルにM82を置いて修理を始めた。

「ここを、こうして。ここをああやって。」

M82だけでも早めに修理したかった。非装甲車両に効果のある狙撃ライフルが今は明の手元にないから優先的に修理する。

「くっそ、銃身内部が異様に曲がっているな。」

銃身を取り外して、銃口の光の角度を目測計算で測り、修理可能か確かめた。

「駄目だな。新しいの、購入するか。」

そう決めた。

「今度、キンジに腕のいい装備科アムドの商売人を紹介してもらうか。」

明は全ての銃を修理できるって訳ではないので、いざと言う時の為に腕のいい技師と商売人である装備科の人を知っておきたかった。

つと、後ろでは白雪が携帯でキンジと電話していた。その内容は分からないが、この言葉に背筋が凍るような寒気を感じる。

「キンちゃん、何で嘘をつくの?」

(し、白雪さんが再び、黒雪さんに成っちゃった!!)

明は、黒雪恐怖症に陥ってしまっていた。

「キンジ、誰か腕のいい装備科の人を知らないか？」

黒雪、もとい、白雪さんの夕食を美味しく頂いた明はキンジに尋ねた。

「装備科の？そうだな、俺が思うに平賀さんだろう。」

「平賀？」

「まだAランクだが、Sランク並みの腕は確かだ。」

「そうか。」

「ただ、問題が。」

「？」

「平賀さん、何でAランクかって言うと、違法改造と相場無視の吹かけ価格で改造や調達をするからだ。」

「問題ないな。金に関しては。」

「そついやお前の同盟、日本の国家予算を遥かに超す金額を1日で成すって、言っていたよな？」

「うん。」

「お、恐ろしいよ。」

「あゝ、もしもし？平賀さん？」

『とーやま君？』

つと、明に頼まれて紹介と同時に注文するためにキンジは平賀さんに連絡を入れた。

「そつだ。ちよつと、紹介したい奴が居るんだ。」

『誰なのだ？』

「あゝ、もしもし。俺俺、つて言う俺俺詐欺は最近はやらないな。あゝ、狙撃科の明つて言う者だが。」

『明つて？あの転校生の？平賀商会に何か御用なのだ？』

「（ひ、平賀商会つて）頼みがあるのだが。」

『何でもお安い御用なのだ。』

「M82バレットの銃身を調達してもらえないか？1mの特注品のを頼む。」

通常は50？から80？辺りだが、明のM82は特注の1m長銃身モデルだった。

『特注だと普段よりも値段が高いのだ。』

「50万でどうだ？」

『オッケーなのだ。』

「（丸め込むのは簡単だな。）じゃあ、頼む。」

『任せてくれなのだ。これから、平賀商會を贖身してほしいのだ。』

「望み通りの物だったら、幾らでも贖身してやるよ」

『じゃあ、最高級の物を用意するのだ。』

そう言って、平賀さんは電話を切った。

「いいか？」

「ああ、サンキュ。」

電話をキンジに返し、玄関の所で眠りに就いた。

ボディーガード 4

― 武偵高校 ―

放課後に、平賀さんが得物を入手したと言う連絡を受け、装備科の平賀さんの所に向かった。

「仕事が早いな。あれ、なかなか手に入る代物じゃあ無いぞ。」

「むふふ、平賀商会を舐めてもらっては困りますのだ。」

「（どうやって、昨日の夜に伝えて今日の放課後に用意できるんだよ？）さすがは、優等生だけあるな。」

「はい、これなのだ。」

ケースから取り出したのは紛れもなく明が頼んだ特注品のM82の銃身だった。

「精度チェックとか行っただ？」

「勿論なのだ。狙撃科のレキさんに頼んで試射してもらったのだ。」

「（レキなら大丈夫だろう）そうか。それと、幾つかの銃弾も注文できるか？」

「お安い御用なのだ。」

まず、銃身の値段である50万を渡し、それから必要な銃弾を注文

した。特殊弾なので、交渉値は引き上げられ、交渉終了した時には30万にもなってしまった。

「（しょ、商売が上手すぎる。）じゃあ、30万で宜しく。」

明は改めて、平賀さんの商売技術の高さを認識した。

「はいなのだ。でも、これは流石に直ぐって訳にはいかないのだ。」

「出来る限りでいいよ。どうせ、暫くはM82が使えないんだから。」

まだ、修理には時間がかかる。銃本体が壊れているから、部品なども本部から取り寄せている。

「はい？」

『俺だ。キンジだ。』

「何？」

『悪いが、食材買ってくれないか？』

帰り道でキンジから突然電話が掛かってきた。

「別にいいけど、何を買ってくればいいんだ？」

『えーと、……………（食材名を言っている）だ。』

「分かった。今夜はカレーか。甘口も買ってくるよ。」

『なんで?』

「辛いので……。苦手。昨日、中華を食べなかったろ。」

『なるほど。』

――キンジの部屋――

夕飯を食べ、キンジが風呂に入っている時に事件は起こった。

「はい?」

突然、白雪の携帯に電話が掛かったのだ。

『白雪、俺だ!』

「キンちゃん!?!」

『助けてくれ。風呂で溺れる!』

「ま、待っててねキンちゃん。今行くから!」

明もこの会話のやり取りを聞いていた。そして、白雪はともかく、明は疑問に思った。

（なんで、風呂場からわざわざ携帯で助けを呼ぶんだ？それに、音も聞こえなかった。）

ダストの一件で分かった通り、明は非常に耳も良い。防音設備が施された壁の向こう側でも音を聞き取ってしまうほどに。

そして、事件は加速した。勿論、白雪は風呂場でキンジの裸を見て、白雪はお相子と言いながら巫女服を脱ごうとする。キンジがそれを必死に止めようとしている最中にもまんを買いに行っていたアリアが部屋に戻る。で、二人の行動を見る。

「こ、こん、こんの。バカキンジ!!!!!!!!!!!!!!」

で、拳銃乱射。

「おわ！」

キンジは慌ててベランダに行き、フックでベランダからぶら下がる。明は部屋から逃げる。

「ふう。助か……ってねえ!!」

ぶら下がっている所を、アリアがそのフックを切り、重力に従ってキンジはベランダから東京湾へ真っ逆さまに落ちる。

東京湾はだいたい水温は25 前後。夜は冷えるからもう少し冷たい。

「おゝい。」

明が出て行ったのは、キンジは間違いなく海に落ちると分かったからだ。外に止めてあったボートでキンジを拾い上げ、部屋に戻った。キンジの体温は、失った体温を戻すために脳が必死に熱を出す。そして、そのまま38 突破。立派な、高熱だ。

「だらしないわね。ボディーガードが風邪ひいてどうするの。」

「すみませんね。誰かさんお陰で冷たい東京湾で海水浴を楽しんだので。」

「まあまあ。キンジもアリアも、その辺に。」

明は仲裁に入って喧嘩を止める。ボディーガード同士で喧嘩してたんじゃないあ埒があかない。

「それで？昨日の電話なのだが。」

明がキンジの耳元で言う。

「白雪の携帯の受信履歴に残っていた番号と、キンジの番号は一致しなかった。」

『なんだって。』

瞬き信号で返す。

「恐らくは別の誰かがキンジを装って、『電話したんだと思う』」

最後はキンジの声で言った。

『お前、擬声が出るのか？』

明が最後の方を自分の声で言ったのに驚いた。

「そうだ。恐らくは、そいつも擬声をしたんだと思う。」

「何しているの明。行くわよ。」

「はいはい。」

アリアが明を呼んだので、カバンを持って部屋を出る。

（擬声が出る人間？）

キンジには、その擬声が出る人間に心当たりが無かった。理子も擬声が出るが、理子があんな電話をする意味は全くないので、ますます分からない。

（一体、誰が？）

そう思っていると頭痛がしてきたので、ゆっくりと横になって眠りに就いた。

ボディーガード 5

—キンジの部屋—

正午ごろ、誰かがキンジの部屋に入ってきた。そして、キンジの枕元に『特濃葛根湯』を置いて行った。それを呑んだので、夕刻頃には熱も引き、体調も回復した。

「キンちゃん！」

白雪はキンジの所に行く。夕方、学校終って直ぐに白雪は明に夕食の食材購入を頼んで家へ直行。で、今に至る。

「風邪は？お熱は？大丈夫？。」

「あ、ああ。大丈夫だ。」

「よ、良かった。」

そう言いながら白雪は泣き出す。

「そ、それくらいで泣くな。」

白雪は涙を拭いながら

「はい。」

つと、言った。

「お、そうだ。」

キンジは昼に枕元に置かれていた『特濃葛根湯』を出す。

「これ。ありがとな。」

「え？」

「お前が買って来てくれて助かったよ。」

白雪は驚きの目で特濃葛根湯を見ながら

「そ、それは。」

「白雪？」

「ううん。何でもない。」

そう言って廊下の方を向き、そのまま走り出す。

次の日、校内はアドシアードの準備でチアをやる者はチアの格好をしている為、キンジは目のやり場に困りながら屋上に居た。

「はあー。」

空を見上げ、下を向く。

「部屋は要塞化、風邪はひかされる、女子はあんな恰好でうるつきやがる。」

ヒステリア・サヴァン・シンドローム

HSSの意味合いでも目のやり場に困り、安全地帯が激減。何とか難を逃れるために屋上に居たのだ。

「キンジ！」

つと、アリア。足を振り上げ、そのまま思いつきり振り下ろす。足の落下速度と踵の固さ。誰がどう見ても分かる完璧な踵落としを頭頂骨の丁度真上に振り下ろした。普通、脳に多少なりとも異常をきたす位置だ。

「痛いー！！」

「もう、白刃取り。一回位は成功させなさいよ。」

白雪はポンポンをキンジに向けながら言う。

デュランダル

「魔剣は鋼をも斬る剣を持っていると言われている。この訓練は今こそ重要な意味を持つよ。」

何度も書くが、真剣白刃取りはそう簡単に出来るものではない。剣の振り下ろすスピードを僅かな剣幅しかない位置で腕で勢いを止める必要があるため、人間がそう簡単に出来る筈がない。

「お前、この練習の為だけにここまで来たのか？」

「私はそこまで暇じゃないわよ。今日の放課後、白雪のメールを全

てチェックして。」

「な、何でだよ？」

「魔剣は、犯行前に脅迫メールを送るのが上等手段よ。」

「出来るかそんな事。大体、何にかあれば、あいつは俺に言っよ。」

足に付いた汚れを払いながら、キンジは言う。

「そう言えば、明はどうした？白雪の護衛をしているのか？」

「護衛ならレキに任せた。」

「れ、レキまで動員したのかよ。」

「パートタイムよ。あの子、狙撃競技の日本代表で出るから、そんなに長い時間護衛できないの。」

明は教務科から辞退要請を受けて今回の白雪護衛に参加している。だから、レキが狙撃競技に出る事となった。

リハビリ・サブマリン
― 本部 ―

「それで、動きは無いのだな。」

「はい。」

艦長のヴォレス大佐は明に報告する。

「日本近海で停船し、ずっとそのままです。あ、そう言えば、昨日に何かが射出される音を探知したと聴音室から。」

「何かが？」

「はい。音紋分析で小型のバイクと思われますが、超音波を打つ前に有効範囲内を逃れた為、形までは。」

明は暫く考え込む。この不審な潜水艦が何者なのか、調査したかった。

「どうにか、調査できないだろうか？」

「無理ですね。常に潜航状態でして、空気入れ替えもシュノーケルで行っているようです。」

「しかし、ずっと機関を動かしているわけにもいくまい。機関にも新鮮な空気を吸わせてやらんと。」

「それなのですが、どうも我々と同じ推進機関なようです。」

「向こうも、ワルター機関を改良した機関を採用しているのか？」

「音紋分析で機関音を調査しましたところ、我々の機関と合致しました。」

「それだけじゃないんだろう。」

「はい。原子力機関音も合致しました。」

「あの潜水艦、やはり、我々と同じ技術を持っていたか。ワルター機関と原子力機関の融合機関なんか、国が装備出来る筈もない。」

「恐らくは。」

「はい。」

「日本政府には？」

「いえ。まだです。」

「分かった。この事は極秘とし、全権限を私に移譲せよ。」

「了解しました。」

行動は迅速だった。ソナー室に移動し

「ソナー、ビーコンを打て。潜水艦に警告する。」

『我、自由同盟旗艦』リバティ・サブマリン『自由潜水艦』。貴艦の所属を問う』

ビーコン信号で送られた。すると、

「潜水艦、転進。高速で遠ざかります。」

「安心しろ。これは、我々を釣って、別の場所に移動させるための囷運動だ。前部、魚雷発射管から追跡魚雷を放て。」

命令を受け、前部の魚雷発射管から誘音式追跡魚雷を放った。潜水艦のスクリー音と機関音を探知して追跡する非攻撃魚雷だ。

「浮上して、へりを出せ。対潜へりと、帰還用のへりだ。」

直ちに浮上し、上部ハッチが開かれた。

「対潜へりは出撃しました。総統も、お気おつけてお帰りください。」

へりを上昇させ、武偵高校へと明は戻った。

ボディーガード 6

明が武偵高校に戻ったところ、武偵高校の屋上にてキンジが倒れているのを見つける。近くには『バカキンジ』と、綺麗に銃弾で書かれた文字が給水塔に浮かび上がっていた。

「はぁー、またか。」

二人の喧嘩は毎度の事。ヘリを旋回させ、ヘリポートへ着陸させた明は、屋上のキンジの倒れている所に行く。

「大丈夫か？」

キンジは目を閉じていたが、明が話しかけて目を覚ます。

「明か。また、アリアと喧嘩しちゃったよ。」

「喧嘩ねえ。」

「お陰で、消えちゃったよ。」

「依頼放棄って事か？」

「多分な。」

「ははは、アリアに限ってそれはあり得んよ。ま、直に分かるだろう。それまでは、白雪の護衛でもしているんだな。」

「お前も、放棄するのか？」

「まさか。ただ、知つてのとおり狙撃手は護衛に向かない。だから、遠くで掩護するよ。」

そう言つて、明は屋上を離れた。

―ビル―

キンジの寝泊りする男子寮の向かいにある小型のビルの屋上が明の第二の寝床だった。白雪と初めて会つた夜に寝たのもここだった。向かいには丁度キンジの部屋が見える。

「護衛つて言つても。夜に突然襲う奴じゃないんだけどな。」

電話でアリアとヘッドセットを介して話をしている明はツアスタバを構える。

『いい、魔剣は複数の敵が居る時は分断して1対1で片付けようとする。だから、私は一旦、白雪の護衛を外れたのよ。』

「なるほどね。こつちも、魔剣についての資料を自由同盟本部から持ってきたが、そんな事は書いて無かつたよ。」

『世界最高の情報収集能力がある自由同盟も、穴があるのね。』

「手厳しい判断で。」

『じゃあ、監視は任せたわ。今夜はレキの所に泊めてもらうから。』

「はいはい。それと、明日で契約は解消。後は自由で、お前さんに付いていくよ。」

『好きにして。』

そう言つてアリアは電話を切つた。明もヘッドセットを外し、狙撃銃を改めて構え直す。

（アリア、後でお前さんとはんでもない真実を知る事になるんだよ。）

明は潜水艦の正体とその潜水艦に誰が乗っているのかを知ってしまった。明をアリアと会わせ、契約へと導いた張本人が、あの潜水艦に乗っている。

（あれは、冷戦の遺物。ボストーク号。だから、音紋分析で分からなかったんだ。世界でたった一隻だけ建造され、録音前に盗まれたソ連の原潜。まさか、奴がイ・ウーのメンバーだったとは）

明は正直驚いている。自分にボストーク号の行方の搜索を依頼してきたKGBの元中佐で、今はGRUに所属する大佐がイギリスへの研修行きを命じられた前日に会つた。死んだはずの男。その男がアリアの事を話し、契約するように仕向けてきた。その男がイ・ウーのメンバーだったとは。

（尤も、アリアから先に目を付けて来たのだが。）

明にとって予想外だったのがその点だった。契約が予想以上迅速に行われ、英国政府は明に殺しのライセンスすらも提供した。無論、

明にとって人を殺すのだけは避けたい。

（今夜は、眠れない夜になりそうだ。）

狙撃手は一睡もしないで目標を狙っている事なんか普通である。明も、その訓練をロシア軍所属時に嫌と言うほど経験している。

次の日の昼休み、キンジは意外な提案をしてきた。

「今夜、花火を見るために白雪を学園島から連れ出すんだよ。」

「花火・・・大会か。正直、あまり好きじゃないよ。」

「どうして？」

「狙撃手は耳も大事なんだよ。花火なんて大きい音を聞きたら、耳が悪くなるし、感覚も鈍る。正直、ついて行けそうにないよ。」

「ヘッドセットで防音対策すればいいだろう。」

「ヘッドセットじゃあ限界がある。まあ、無いよりはマシだが。」

「じゃあ。」

「遠くに見張っている。これ。」

そう言って明は小型の無線機と喉咽式こういんマイクなどを渡した。

「これで連絡を取り合う。喉の振動で音を拾うから、花火の音に邪魔されない。」

「分かった。じゃあ、駅で待ってるから。8時にな。」

「あ、ああ。」

ボディーガード 7

―学園島駅―

「揃ったな。」

キンジは制服、明も制服。白雪は浴衣。

「流石は大和撫子。和服は似合っている。」

明は白雪の浴衣姿を見て称賛する。

「あ、ありがとう明。き、キンちゃんはどうかな？わ、私の浴衣姿。」

白雪は目を輝かせてキンジに聞く。

「あ、ああ。似合っているよ。とっても。」

「ほ、本当！？嬉しいな。キンちゃん様に褒められた。」

つと、燥ぐ。

「それじゃあ、モノレールに乗って行くぞ。」

カードをタッチパネルに当て、駅の構内に行く。モノレールは直ぐに来た。

「それじゃあ、あとはお二人さんで楽しんできなよ。」

出店の所まで来て明は別れる。狙撃銃は後ろに背負っているケースの中にツアスタバが入っている。

「それで、今日が契約の最後の日だな。」

『分かってるわよ。後は任意で私についてくるんでしよう。必要なら、また契約してあげてもいいわよ。』

「正直、今契約すべきは僕じゃなくてキンジの筈だろう。」

『う、煩い。キンジハは奴隷。奴隷なの。いいから、見張ってなさい。』

「分かりました、女王様。」

『茶化さないで。』

「で、冗談はさておき。どうする？魔剣が現れたら。」

『勿論、逮捕するわよ。魔剣の罪もママに着せられてるんだから。』

「それはそうだが。そう一筋縄でもいきそうにない。奴は想像以上に狡猾な奴だ。恐らく、白雪のもとに電話したのも奴だろう。って事は、奴も擬声を使えるって事だ。」

『魔剣も、貴方と同じ幾多もの声色を持っているのね。』

「そうなるだろう。それでいてかなり用心深いようだ。一対一で戦ったらず勝てない。」

『だからこそ、魔剣は一対一になるように罠を仕掛ける。それで、雪山の狐さん？貴方なら一対一にする最適な方法を知っているわよね。』

「この場でその名を呼ばんでくれ。そうだな、メールで脅してアドシアの時に呼び出して連れ去る。それが、最適な方法かな。場所は、人目に付かないかつ、危険な場所。地下の弾薬庫が最適だろう。」

『さすがは私が契約するだけの人間。私も同意見よ。そこに、おびき出しましょう。』

「どうやら、そのメールが来たようだ。」

明はツアスタバをずっと白雪に向けており、暗視スコープに移った白雪の顔が一瞬変わった事に気付いた

「メールで送られてきたな。全く、魔剣も情報操作のプロのようだ。白雪のメアドを知っている。」

『これで、アドシアの時に姿を見せるわね。絶対に逮捕してやるんだから。』

「アリア、そう早まるなよ。時を逃せば、逮捕など出来ん。慎重に行動しないと、奴は姿を現さんだろう。」

『分かってるわよ。じゃあね。』

そう言つてアリアは無線を切った。明は狙撃銃をケースに入れ、喉咽式マイクのスイッチを入れた。

「キンジ、聞こえるか？」

『なんだ明か。こっちは終わったぞ。花火の時間を間違えちまつて線香花火をやっただけだけだな。』

「だろうな。先に帰ってくれ。こっちはやる事があるんでな。」

―自由同盟潜水艦 アロイス・フロンティア号―

「総統、本部にて呼び出しが掛かっておりますが。」

「だから貴艦を呼んだのだ。」

東京湾にて海底鎮座していた自由同盟標準型潜水艦『ルーベリック級』の2番艦が明を拾つて本部目指して水上航行をしていた。

「海自の許可は取っておりますので、本艦が攻撃を受ける事はありません。」

「潜水母艦『ガーディアン』に繋げ。」

「了解。」

艦長は無線機を明に渡した。

「ガーディアン艦長、こちらは自由同盟総統だ。現在本部を目指して水上航行中。」

『了解、総統。もうじき、合流できます。』

「本部到着後、貴艦は本艦の整備並びに補給等を願いたい。」

『了解しました。右舷方向より貴艦と並走航行をします。波に気を付けてください。』

明は無線機を切った。夜の海は、驚くほど静かである。

―自由同盟本部 リバティー・サブマリン号―

「それで、この潜水艦の処遇をどうするか本気で検討せねばならない。」

ボストーク号の図面がコピーされて送られてきている。

「ロシア政府は本件に関し、一切の関与をしないようです。」

「では、沈めてもかまわんだろう。」

「しかし、ここで沈めたら放射能を出し続ける迷惑な鉄の残骸になってしまう。」

ウォレス大佐は原潜であるボストーク号が撃沈前に原子炉を封鎖するとは思えないと言い、撃沈による放射能汚染の危険性を述べる。

「ウォレス大佐、だれかが原潜に乗り込み、原子炉を封鎖のちに脱出できないだろうか？」

「無茶言わないで下さいよ。ずっと潜航状態の原潜にどうやって乗り込むんですか？それに、得体の知れない敵の所に乗り込むのは御免こうむりますよ。」

「チャンスは来る。最悪は、私自身が行って封鎖する事も考えねば。」

「総統、ヤーベル海軍大將が無茶をしてはならないと言っていたではありませんか。貴方まで失えば、自由同盟は崩壊しかねません。」

「分かっている。しかし、」

「とにかく、無茶は本部を預かる身として支持は出来ません。総統戦死は、自由同盟全軍の士気に関わります。」

もし、ここまで言っても明が行くと言い出したら、背負っているブローニングM2重機関銃え蜂の巣にされただろう。

「分かった。では、撃沈方針だが撃沈方法と詳細はまだと言う事で。」

「はい。」

「明日はアドシード。お前さんらが来れないのは残念だが、見張りは怠るなよ。」

「分かっております。」

明は飛行甲板に移動し、待機しているJu52に乗った。原型機飛行から70年以上も経っているにも関わらず、現在でも少なきながら飛行を続けるドイツの名輸送機。第二次大戦では高官の移動から兵員の輸送まで、スペイン内戦では爆撃機としても運用された幅広い航空機である。

「パラシュート降下なんて久しぶりだ。」

「総統なら出来ますよ。」

落下傘を背負い、椅子に座る。潜水艦は風上に向かって全速で航行を始める。滑走路総距離は2800m。通常でも飛び立てない訳ではないが、気流の安定しない海上では安全の為に全速航行による発艦を義務付けられている。

「では、行きますよ。」

滑走し始め、飛行甲板ギリギリまで使って発艦した。大戦中なら、世界中の何処へでも好きな場所を好きな時間に攻撃できる潜水空母だろう。

ボディーガード 8

―学園島―

「もうちょい高度下げろ。」

現在、高度1500m。スカイダイビングとしてはかなり低い高度から落下傘降下となる。だが、高度800からの落下傘降下での成功例もあるから、これはこれでありだろう。

「空自はやはり動けんか。」

「はい。」

操縦桿を握るパイロットは言う。武偵殺し事件での自衛隊関与の問題が色々と浮上し、自衛隊は身動きが出来ない状況なのだ。この状況で他国が攻めてきたら、日本は終わりだろう。

「ま、例え来ても。攻撃は出来ないがな。」

明は眼下に見え始めた学園島を確認し、後部扉を開ける。

「それじゃ。」

そう言ってダイブ。暗い中を月明かりを頼りに目標を修正していく。

「少しずれたな。」

高度1000・・・900・・・800・・・どんどん地面が近づく

いてくる。

「夜は流石に寒いな。」

高度200程まで来たところでパラシュートを開き、上手く操作してピンポイントでキンジの部屋のベランダに着地した。

「上手くいった。」

明は自分でも驚いている。ロシア軍時代でも落下傘降下の経験は皆無。自由同盟に入った時に数回行っただけなのに正確にキンジの部屋まで飛んでこれた。

「今夜は遅いし、今日は寝るか。」

明日はアドシード。玄関の所で狙撃銃を立て掛けて眠りに就いた。

――武偵高校――

「で、話って何？」

突然、登校中にレキから携帯で呼び出しを受け、体育館裏に明は居た。

「お願いがあってきました。」

「それは分かる。内容は？」

「私の代わりに、狙撃競技を出てください。」

「え？だって、もう登録されているし、途中変更は効かないけど。」

アドシアードの競技で途中変更は無理。

「私に変装して出てください。声は私の擬声も出来るでしょう？」

「女、女装しろってか？最高だな、レキ。お前さん、感情分らないから本気だと思ったが、冗談ならその位にしてくれ。」

明は冗談だと思った。しかし、

「私は本気です。」

レキは本気だった。

（こ、ここで逃げたら。間違いなく狙撃されるな。）

自分の出生の秘密も知っている。明にとって、レキがどんな人間かを知っている。

（あゝ、人生最悪の厄日になりそうだ。）

「2000mが成功したら次は外しても構いません。」

相変わらず、感情の籠っていない声で明に言う。

「いいのか？」

「はい。」

ケースからツアスタバを取り出し、マガジンを確認する。ドラゲノフと非常によく似ており、銃床を変えるだけで見分けがつかない。

「本気で女装しろと？」

確認の念を込め、もう一度聞く。

「はい。」

返ってくる言葉は、明にとって期待している言葉と違った。

「最悪だ。」

レキと全く同じ格好をする。身長までどうやって似せたかは自由同盟の技術露呈に繋がるために明記できない。

「最高だよ、レキ。」

嫌味を込め、レキに向かって言う。傍から見れば、瓜二つである。

「はい。」

「頼む、二度とこのお願いはするな。それと、白雪には警戒してお

けよ。」

「はい。アリアさんから依頼を受け、まだ継続ちゅうです。」

それを聞き、競技に参加するために明は会場に向かった。

午後、受け付けが一段落し始めた所に、事件が起きた。

「おい、遠山。」

受け付けで携帯に着信したメールを読んだところを綴先生に？まれる。

「星伽は何処だ？明の姿も見えないが、この際どうでもいい。」

色々、問題発言が含まれるが、キンジは驚く。

「え？白雪なら生徒会のテントに居るんじゃない？」

「居たらここに来ない。おい、星伽は何かメールを受け取っていなかったか？奴が絡んでるなら、兆候きざしがあつた筈だ。思い出せ！」

「奴？」

キンジは奴と言う単語に疑問を感じるが、アリアと屋上でのやり取りを思い出し、納得する。

『魔剣は誘拐する前に目標ターゲットの携帯に脅迫メールを送るの。』

デュランダル
「魔剣！」

思いだし、振り払って駆け出す。

「白雪、頼む。出てくれ。」

走りながら、白雪に電話を掛ける。

「何で出ないんだ？」

学園島を走りながら、そう嘆く。

「くそ、アリア。明。どっちか出てくれ。」

しかし、どちらも繋がらない。

「二人とも、どうしたってんだよ？」

交差点まで来たところで息切れする。その時、携帯に着信。

「アリアか？」

慌てて携帯に出る。しかし、電話の主は

『いいえ。』

この感情の無い声。

『レキです。』

狙撃科の天才少女、レキであった。

『クライアント依頼主の白雪さんが失踪したと聞きました。明さんから警戒するよう言われていたのに、不覚です。』

「明は何処にいるんだ？」

『明さんは私の代わりに狙撃競技に出てもらっています。もう直ぐ終わりますが。終わり次第、掩護に向かうと言っていました。』

「分かった。とにかく、お前も白雪を探してくれ。」

そう言い、駆け出そうとすると。両足の間に狙撃銃の銃弾が着弾。

『落ち着いてください。冷静さを欠けば、人は万事に劣ります。』

感情の籠つてない声で言ってくる言葉。こういう時、レキの冷静さには舌を巻く。

「ああ、そうだな。」

深呼吸をし、感情を落ち着かせ、

「レキ、白雪の目撃情報は？」

改めて冷静な声でレキに聞く。

『12分前、車両科専用格納庫前で確認しました。』

（車両科の格納庫前？白雪の行くはずのない所だ。）

キンジはそう思いながら

「レキ、他に異常は？」

追加の情報を聞く。

『車両科の第三備品倉庫の扉が開いています。通常は使われることが無いので、不自然かと。』

「第三備品倉庫だな。了解。」

レキの情報を頼りに、車両科の第三備品倉庫へ向かった。

「よ。待ちくたびれたよ。」

そこには、レキ。しかし、レキの使わずの言葉。

「お、お前。明か？」

ジャージに着替えたレキに変装した明。

「そうだよ。レキが変わってくれて言いだしてな。理由は分かんが。」

レキのマスクを破り、本来の顔に戻る。

「もう、いいのか？」

「ああ。」

マスクを破った瞬間に身長も元通り。明はツアスタバを持ち、両太腿のホルスターにデザートイーグルをしまう。腰の鞘には二本の刀。二人は地下の弾薬庫に続く階段まで行き、ゆっくりと降りて行った。

ボディーガード 9

―弾薬庫―

「明、ここじゃあ銃を使うなよ。」

キンジは明に念を押す。

「当然だ。こんな所で心中じゃ、割に合わん。」

明は刀を抜いて言う。

「白雪はここを降りて行った。」

明はペンライトを使って階段を下りていく。白雪の足音が聞こえ、ペンライトの明かりを消すのであった。

「白雪はもう少し先に居る。距離からして15mってとこだな。」

明が足音から正確に白雪の位置を割り出した。弾薬を集積している地点を僅かに抜けた位置に白雪が居る事を突き止める。

「我に続け、白雪。」

機械音声に似た、低めの声。暗闇で姿が見えない魔剣は白雪を誘惑する。

「私が、君により相応しい場所へ連れて行ってやる。イ・ウーに。」

白雪は、その誘惑に乗ろうとしたその時に

「白雪!!」

我慢できなくなったキンジが飛び出す。

（はぁ、何の為に隠れたんだよ。）

明は呆れる。

「キンちゃん!!」

「どいてろ、白雪!」

そう言って、キンジは愛用の刃の紅いバタフライナイフを構えて姿の見えない魔剣目指して走って行く。

「だめ、逃げて!」

白雪がそついった時、すぐ横を投げナイフが通過する。それは、キンジの足元に突き刺さり、キンジは転んだ。

「く、そ。」

そう言つて、立ち上がるうとしたときにはキンジは既に立ち上がれなかった。

「な!？」

地面が突き刺さった投げナイフを中心に凍って行き、キンジの動きを封じる。

「そこにいるのは分かっている。出てきたらどうだ? 明。」

更に、魔剣は白雪の手を掴みながら明の名を呼ぶ。

「へー、情報収集に抜かりは無いらしいな。」

明は弾薬棚の陰から身を出す。

「当然だ。情報が少なくては、勝利できないからな。」

そう言いながら、再び投げナイフがキンジとそして、明に向かって飛んでくる。

「そろそろ、いいんじゃないか? アリア。」

「そうね。」

影に隠れているもう一人のボディーガード。アリアがキンジに向かっていている投げナイフを自らの刀で払い落とす。明も、刀を使って払う。

「ア、アリア!？」

キンジはアリアを見るなり、驚きの表情をする。

「だらしないわね。まあ、キンジにしてはよく遣れたと思うけど。正直、明を残したのは正解だと思ったわよ。」

明かりが付き、弾薬庫は明るくなる。しかし、魔剣の居るところは暗い。

デュランダル
「魔剣。未成年者略取未遂の容疑で、逮捕するわ！」

刀を魔剣の方に抜けながら、アリアは言い放った。

「あんたの遣り方は調査済みよ、魔剣。敵が複数いる場合、あんたはそれを分断、一騎打ちで片付けようとする。だから、私はわざと白雪の護衛から外れたの。あんたをおびき出すために。」

アリアは屋上でのんびりしていたキンジを見て、怒りで制裁。その後、一時的に護衛を離れていたのだ。

「アリア、お前。」

「見損なわないで。私は武偵憲章以前に、依頼主との契約は絶対に守るから。」

「そういう事だ。」

明が投げナイフを抜きアリアはキンジの腕に付いている氷を刀で剥がす。

「まあ、あの時にアンタにムカついたのは事実だけだね。」

アリアのこの発言に、キンジは笑うしかなかった。

「それで勝ったつもりか？」

魔剣は突然、白雪を連れて暗闇の中に入って行く。

「待て！！」

明がツアスタバを構え、2発だけ発射する。その2発は奥のライトをつけるスイッチに一直線に飛翔、ライトが付いた。その時、地震みたいな揺れが起こって、排水口から水が出始める。

「地下を爆破したか。」

それにより、地下を流れる水が逆流。ここへ、入り込んだのだ。

「み、水が。」

アリアは慌てる。

「白雪！」

キンジは白雪の連れ去られた奥へ入って行く。明の放った弾丸が見事にライトのスイッチを掠め、それによってライトが付いているので、素早く行動が出来た。

「白雪。」

白雪は、錠付きの鎖で鉄パイプに括り付けられている。簡単に、外せそうにない。

「き、キンちゃん。御免なさい。誰にも内緒で来ないと、ここを爆破して地上にいる人を全員殺すって脅されたの。」

明とアリアは錠や鎖を調べる。

「駄目だキンジ。こいつは、鍵が無いと開けるのは困難だ。」

明が錠を確認して、鍵開け用の器具で調べるが、直ぐに内部構造を理解して難しいと考える。

「開けるには、相当な集中力と根気が必要だ。だが、時間が無い今、これをゆっくり開けている時間は無い。」

「じゃあ、明とアリアは奴を追ってくれ。」

キンジがそう提案した。

「え？何で、あんたじゃアンロックスキルが低いんじゃないの？」

「だからだ。俺が根気よく粘るが、恐らくは解除できない。だから、お前らで魔剣を追い、鍵を取って来てくれ。俺よりも、お前らの方が早い。」

「で、でも。」

アリアは躊躇う。

「アリア、気持ちは分かる。しかし、今の状況を見て、キンジは冷静に判断したんだ。それに、お前。」

「泳げないんだよな？」

キンジが言葉を引き継ぐ。

「ど、どうしてそれを？」

アリアが驚いたように言う。

「理子の調査報告にあった。武偵殺しだったとはいえ、理子の情報収集能力は超一流だ。」

「お、泳げないんじゃないもん。う、浮き輪があれば。」

泳げない人の典型的な言い訳である。

「そんな物は無い。いいから行け。」

「でも。」

アリアはそれでも躊躇う。

「いいから行け。今は1秒でも欲しい。」

アリアは暫く躊躇い続けたが、ようやく覚悟を決め

「分かったわ。待ってて。必ず鍵を取ってくるから。」

そう言っ明と共に梯子を上った。

「アリア、お前は右を。こっちは左に行く。」

水にぬれた事と弾詰まりと言うアクシデントを犯したツアスタバを捨てて来て、デザートイーグルを抜いた。

「アンタのその銃、久しぶりね。」

ロングバレルモデルのデザートイーグルを二丁で構え、自分の進行方向を見ながら。

「自分でも、そう思うよ。」

警戒しながら、歩み出していく。

ボディーガード 10（前書き）

かなり、長めだと作者は感じます。今までの中で一番長い気がします。

書くのに3時間以上も掛かりました。

ボディーガード 10

―弾薬庫―

（くっそ。こいつは俺の鍵解除技量^{アンロックスキル}じゃあ、これが限界だな。）

キンジは3つある内の1つをようやく解除する。

「キンちゃん。もう、行つて。」

突然、白雪から力ない声が発せられる。

「私、キンちゃんを危険な目に合わせたくない。」

「馬鹿言つな。」

「星伽の巫女は守り巫女。誰かの為に身を捧げ、擲つのが定め。だから、お願い。」

「何言つてるんだ！？お前を置いて行けるか！」

「いいの。私が死んでも、誰も泣かない。私は先生から持て囃されただけ。それは、星伽の力を欲しての事。」

キンジは、自暴自棄になり始めている白雪を宥める為に考えた。

「心配するな。アリアが、明が必ず鍵を持つてくる。だから、諦めるな。」

「泣かせるね。」

キンジの背中に仕掛けておいた盗聴器から聞こえてくる声を聴き、明は言った。

「情報を隠していたのに、ここまで信じるとは。」

キンジの人を信じる心の奥深さを知る。そして、それが時に、弱点になる事も。

「アリア、そっちは？」

ヘッドセットに直結する無線機を介し、アリアに連絡する。

『駄目よ。見当たらないわ。暗くて、視界も狭い。』

「明かりが見当たらん。このまま探すしかない。」

デザートイーグル長銃身モデルを持ち、明はアリアと反対側を探す。

「見当たらないな。こりゃあ、キンジの期待には応えられそうにないな。」

明がそういった時、下から小さな爆発音。

「下が、排水口が吹っ飛んだな。」

水が少しずつ上に昇ってきている。キンジ等の関係で、弾薬庫へ通

じる扉を閉めることが出来ない。

『明、キンジが昇って来たわよ。入り口に来て。』

「りよ、了解。」

アリアから報告を受け、一旦入り口に戻る。

「白雪、大丈夫？」

「ありがとう。アリア。」

白雪とも合流。

「キンちゃんも、明も。」

『キンジ、白雪と下であつた事をかま掛けてくれ。』

明は念のためにキンジへ瞬き信号を出す。キンジも、どうやら同意見だったようだ。

「白雪。唇、大丈夫か？さつき。」

キンジがかまを掛ける。

「え？うん。大丈夫だよ。」

その瞬間、キンジはベレッタを抜いた。それを見て、明もデザート

イーグルを抜く。

「アリア、逃げろ。」

キンジは発砲した。しかし、白雪は直ぐに反応して防弾巫女服の袖で弾を弾き返す。

「キンジ、明。どういう？」

アリアがガバメントを抜いた時、白雪、いや、白雪に化けた魔剣がアリアの首元に刀を持つてくる。

「白雪？」

アリアがそう言った時、魔剣が氷の息をアリアの右手に吹きかけた。すると、手が軽く凍る。

「あつ、っー。」

瞬間的に凍る事で、熱さと勘違いする。熱に似た痛みを感じ、アリアは右手のガバメントを落とす。

『キンジ、念のため問う。下で、何があった？そして、今お前はアレか？』

明が瞬き信号で問いかけてくる。取りあえずキンジは、『そうだと瞬き信号で返したただだった。』

「く、っー。」

アリアは刀を首元から離そうと、ガバメントで刃先を擦る。しかし、再び氷の息を左手に吹き付けられ、左手のガバメントも落としてしまう。

「あ、あんた。魔剣なのね？」

「その名前で呼ぶな。人に付けられた名は好きではない。」

（いや、名前は人に付けてもらうものだろう。）

明がそう、心の中で突っ込んだ。

「うるさい。ママの冤罪の内の107年分はアンタの罪よ。とっ捕まえて絶対に償わせてやる。」

「ふ、リュパン4世の言っていた通りの威勢の良さだな。」

魔剣はアリアの肩に突きつけている刀を少し動かしながら言う。

「お前は偉大なる我が祖先に似ている。その姿が美しく、愛らしく。しかし心は勇敢。その名は、ジャンヌ・ダルク。」

ジャンヌ・ダルク。百年戦争の最中、オルレアン解放に貢献。百年戦争の勝利に貢献した。しかし、百年戦争の最中のコンピエーニュ包囲戦の最中、ブルゴーニュ派に捕らえられ、その後の宗教裁判で断罪。ルーアンにて火刑に処された、フランスの国民的英雄。今でも、フランスの最も尊敬する女性では上位に入るほど人気が高い。

「嘘よ。ジャンヌ・ダルクは火炙りにされて10代で死んだ。子孫なんて居ないわ。」

ジャンヌダルクの死んだ時の年齢は19歳。若くしての死であった。

「ふ、それは影武者だ。我らは策士の一族。闇に潜み、歴史を操り、誇りと知略を伝えてきた。そこに居る、明の所属する自由同盟にも、私の祖先が一時期所属していた。」

「記録にはあった。まさか、本当に生きているとは思わなかったがな。」

「だろうな。私が、その30代目に当たるジャンヌ・ダルクだ。」

「百年戦争の戦禍を、よく逃れたな。」

「自由同盟の援助があったからな。何とか、ドイツ経由でロシアまで逃げ切れたよ。」

「それはどうも。まさか、ジャンヌ・ダルクを救っているとは思わなかったよ。所属していた記録はあるが、助けた記録は無かったのだな。」

「だろうな。アリア、私と一緒に来てもらおう。リュパン4世の攫い損ねた貴様も貰っていく。」

「話を変えんな。」

明がデザートイーグルを構えてジャンヌに狙いを付ける。キンジも、同じく狙いを付けた。

「動かない方がよいぞ。アリアの首が飛ぶ事になる。」

ジャンヌは刀を首元に持つてきて言う。

「いいから撃ちなさい。」

アリアはあくまでも発砲を促す。

「ふふ、そのお喋りな舌から凍らせてやろう。」

アリアに近づき、アリアの口元に唇を近づける。

「アリア!!」

キンジがそう叫んだ時、重り付き鎖が飛んできて、ジャンヌの持つ刀を撒き付けて引っ張る。

「何!??」

ジャンヌが慌てて刀が飛んだ方を見ると

「魔剣、これ以上私の仲間を傷つけさせない。」

白雪が居た。

「はあああ!。」

飛び、刀を持って魔剣に切りにかかる。

「くっ!」

巫女服で防御し、発煙手榴弾を落として姿を消す。

「逃げたか？」

キンジが銃を構えながら言う。

「いいえ。まだ居るわ。奥に。」

僅かに人の気配を感じるアリアは全員にそう言う。

「どうする？」

「戦う、そして逮捕する。」

アリアがキンジに言う。その時、煙感知機が発煙手榴弾の煙を火災による煙と誤認し、消火装置を作動させる。

「ふふふ、お前たちは私の本来の姿を知らない。」

奥から聞こえるジャンヌの声。

「これは、言わば前座の余興だ。」

「御託はいいから。早く出てきなさい！」

そう言ってもジャンヌからの返事は無い。アリアは痺れを切らし、背中にしまっている二本の刀を抜く。

「っー。」

しかし、凍らされた為に手に力が入らない。それに、痛みも残っている。持てる状況では無かった。刀を落とし、アリアは痛みで痺れる手を見る。

「アリア、手をかして。」

白雪がアリアの手を握り。

「少し、沁みるよ。」

超能力の一種と思われる治癒で、治療する。

「う！くー。」

言われたとおり、沁みる。しかし、痛みが和らいでくる。

「もう、大丈夫。」

「あ、ありがとう。白雪。」

「でも、この氷は強い氷。私の力で癒しても、元の状態に戻るには暫くかかる。だから、アリアはキンちゃんが守ってあげて。」

前回までの喧嘩が嘘のようだった。

「私が、一人で敵を倒すから。」

「でも白雪。」

キンジが躊躇うように言つと。

「信じて、キンちゃん。」

決心したように白雪は言う。

「感動的だな。」

その時、ジャンヌの声が響き渡つた。

「だが、愚かしい。お前一人で私を倒すなどと。」

消火装置から出る水が、氷の雨に変わり、そして止まる。

「イ・ウーで研磨された私に、原石に過ぎないお前が私に勝とうなど。」

床が凍り始める。

「何年経とうとも不可能だ。それに、お前は星伽を裏切れない。」

ジャンヌ・ダルクの纏っていた西洋甲冑を軽量化の為に幾らか装甲を薄くされ、しかも動きやすいように改良されている。それに身を包んだ30代目ジャンヌ・ダルク。

「それは、今までの普段の私。でも、今は星伽のどんな掟も破れるたった一つの存在の傍にいる。」

キンジの方を少し見ながら、白雪は言った。

「キンちゃん、これから星伽の掟を破り、力を使います。キンちゃん、ここからの戦いでもう、私を見ないで。これを見たら、キンちゃん。私の事、嫌いになっちゃう。」

心配そうに白雪は言うが。

「安心しろ白雪。この世であり得ない事は一つ。俺が、お前を嫌いになる事だ。」

（流石、ヒステリアモード。この場で口説く余裕があるのか。）

明は感心した眼差しでキンジを見る。

「ジャンヌ、もう貴方を逃がす事が出来なくなった。」

髪留めを外し、少し声色が変わる。

「星伽の巫女がその身に秘める、その禁制軌道を見るからだよ。」

刀を片手で持ち上げ、青竜刀見たいな持ち方になる。

「私たちはこの始祖の力をずっと継いできた。2000年もの時を。」

「

刀に炎が宿り、纏う。

「白雪って言うのは、本来の名を伏せるための伏せ名。私の本当の名は『緋巫女』。」

そう名乗り、一気に斬りに掛かる。

「で、どうするの？」

ジャンヌと白雪が斬り合っている。人間レベルじゃない。

「明、あんたの刀。あれを受け止められる？」

「多分、無理。」

日本の刀は西洋の刀と違い、太くない。日本刀は相手を斬る為に存在する。しかし、西洋刀は相手の甲冑を破壊するよう、太めが多い。

「精度は世界一だが、太さは無い。」

日本刀は、その綺麗な流線の形と切れ味、その職人技術から海外での人気が高く、刀剣マニアが居る程だ。有名なので、スティーブン・セガールが挙げられる。

「じゃあ、キンジ。あれをやるしかないわよ。」

「あれ、ね。」

「いいから、覚悟を決めなさい。」

アリアはキンジに向かって言う。

「他ならぬアリア様の頼みだ。引き受けない訳にもいかないでしょ

う。」

「明、デザートイーグルで掩護して。」

「了解。」

一丁だけ抜き、構える。

「それじゃあ、行くわ!」

いきなり、アリアが飛び込む。

「ちっ!」

アリアが飛び込んだのを確認したジャンヌが反応し

「ただの武偵如きが。」

氷を飛ばす。しかし、アリアは脱ぎ捨てられたジャンヌの着ていた巫女服で防御する。

「何!」

その後ろにキンジが居る事に気付く。

「くそ。」

ジャンプで、アリアをかわし、キンジに向かう。

「あっ！」

そこを狙って明が発砲。ジャンヌは刀で防御できたが、少し怯む。その一瞬の怯みを狙い、キンジはアリアへベレッタを投げれた。そして、

「よっ。」

キンジはアリア（半分はアリアが強引に遣らせた。）の特訓で何とか感覚を掴んでいたのを、ヒステリアモードの超人的身体能力で真剣白刃取りを成功させた。

チェックメイト
「王手だ」

「武器を捨てないさい。」

明とアリアが銃を向けて言った。

「まだだ。武偵法9条。武偵は人を殺せない。だが、私は違う！」

刀が、根元から凍り始めた。

「な！」

明が刀を抜き、凍り始めている先を喰い止める。

「氷が、そっちへ移るぞ。」

ジャンヌがそういった時、明の持つ大包平に氷が移る。

「不味い。」

そこへ、走る足音。

「星伽双剣流、ヒビノホトギノカミ緋緋星伽神。」

居合抜きの要領で、刀を抜き魔剣を貫通して天井まで届く巨大な火柱を立てる。

「あ、危ね。」

辛うじて刀を戻した明は、巻き込まれなかった。

「わ、私の、聖剣が。」

ジャンヌは呆然としていた。自分の愛刀が折れた気持ちは、明は少しは分かる。愛刀は自分の分身みたいなもの。それが、折れたなら自分が折れたようなもの。

「か、完敗だ。」

折れた魔剣を床へ落とし、大人しくアリアに手錠を掛けられた。

この後、ジャンヌはマスタース教務科の教師に連れて行かれたのだった。

ボディーガード 10（後書き）

何と言うか、10話まで引っ張るつもりが無かったのだが。その、引っ張ってしまっで申し訳ない。今回、長めなのも申し訳ない

間話 2

―東京武偵高校―

「なかなか、いいものだな。」

ステージでは、アドシード最後のメインイベントと言すべきチャとバンド演奏が始まっている。武偵のイメージアップを兼ねているので、女子は目立つようなチアコス。

「男子には、少し気の毒かな。」

ベンチで座って見ている明は、端っこの方でバンド演奏をするキンジと武藤、それに不知火等を見る。

「ここに居たんですね、総統。」

聞きなれた声に振り返ると、ヴォレス大佐が立っていた。

「来たのか？」

「はい。」

M2ブローニングとバックパックは携帯していない。こんな所でそんな帯銃は目立つから置いてきたのだろう。

「結局、総統は武偵を目指すことにしたんですね。ロシア軍には戻らずに。」

「自由同盟の地位を使えば、何時でも動かせるよ。依頼を終えたら、除隊する積りだ。」

「それにしても残念です。総統なら、かなりの地位まで上り詰めたと思っただのに。」

「そう言うな。『我が道は、我が決める。』今には残らん、素晴らしい諺だよ。」

明は、チアダンスとバンド演奏を見ながら言ったのだった。

「そうですね。人は無限の自由。それを抑圧することは出来ない。そして、その自由を追い求めるのが自由同盟。」

「それが、我々の創られた理由だ。」

「総統、最終的にはどうするお積りで？依頼は？」

「原潜、ボストーク号を奪還せよか。今更、あんな骨董品は残す必要もない。遺物は、大洋に沈めるに限るよ。」

「沈めるんですか？」

「まだだ。必要が来たら、80？連装砲で沈めてくれ。」

— キンジの部屋 —

「大成功だったな。」

部屋に戻っていたアリアとキンジ、それに白雪を見て言う。

「何処に行ってたのよ、明？」

「教務科に呼ばれてた。報告書も一緒に作成しといたから、お前さんの残業は無し。」

報告書をテーブルの上に置く。

「それにしても、ずいぶん仲良くなったな。アリアと白雪。」

白雪とアリアはソファーに並んで座っている。初めとは大違いであった。

「それに、白雪もアドのチアをやるとはな。」

明が聞いた話では、白雪はアドのチアはやらない筈であった。

「チアの枠に一人、欠員が出たのよ。それで、私が白雪を説得して出したの。お陰で、練習は無駄にならずに済んだけど。」

そう言っつて、アリアは白雪に『ありがとね』と言う。白雪は、それに頷く。そして、

「あのね、私からも言う事があるの。」

白雪は決心したように言う。

「アリアなんでしょう？特濃葛根湯を買って来て、キンちゃんの枕

元に置いたの。」

「え？」

キンジは少し驚いたようにアリアを見る。

「嫌な女だよね、私。でも、嫌な女のままに居たくないの。だから、ごめんなさい。」

素直に、アリアに頭を下げる。

「し、白雪。」

あまりの豹変ぶりに、アリアも戸惑う。

「も、もういいわよ。この話はこれで終了。」

平常心を装って終了させた。そして、立ち上がり。

「そんな事よりも白雪。アンタも私の奴隷になりなさい。」

指を指しながら白雪に言う。

（ふ、アリアなりの信頼なのだろう。奴隷と表現するのは、どうかと思うけど。）

明は口元に手をやり、少し笑みを浮かべる。

「今まで私は、どんな事件でも相手でも、自分と奴隷パートナーさえ居れば勝てると思ってた。でも、今回は三人の力があって倒せたんだと思う

わ。だから、あんたも私の・・・」

口元に手をやり、咳払いを一度した後。

「つまり、仲間になりなさい。」

（へへ、あのアリアが仲間ね。）

キンジはアリアの口から『仲間』と言う単語が出たことに感心する。

「で、でも奴隷って。キンちゃんの奴隷なら、ともかく。」

最後の方は小声で白雪は言う。アリアはポケットを探り、カードキーを取り出す。

「ほら、これ。キンジの部屋の合鍵。今後自由に、入ってよし。」

つと、キンジ断り無くアリアが勝手に決めてしまう。

「わあ、ありがとうアリア。合鍵。キンちゃんの部屋の合鍵。キンちゃんからの愛の証だよ。」

頬を赤らめて、白雪は言う。

「あのな。」

キンジは呆れる。明は再び、小さな笑みを浮かべる。

「但し、奴隷同士でこの間みたいな、その。やらしい行為は禁止。ああいうのは、チームの士気を。」

つと、アリアが集団における士気的重要性を説こうとしていると、白雪は立ち上がり。

「アリア、抜け駆けするつもりね？」

またまた登場。黒雪さんモード。それを見た瞬間、明は部屋から一瞬で姿を消す。

「はあ？」

アリアも身の危険を感じ、少し後ずさる。

「言っておきますけどねえ。私だって、私だって。」

刀を白雪事、黒雪は抜き

「キンちゃんとキス、したんだから！！」

「みゃ？、何なのよ！？」

アリアが後ずさったが、時すでに遅し。白雪の間合いからは逃れる事が出来なかった。通常、侍などの刀を扱う者には自分から一二歩で刀が届くまでの間合いが存在する。それが長い程有利になる。黒雪の間合い、かなり広い事になる。

「ふ、ふ、ふ。」

黒雪は刀を振り、アリアは寸での所で避ける。そして、黒雪の動き

が一瞬止まったのを見てジャンプ。間合いから一時的に逃れられた。

「引き分け。だから、引き分け。そこから私が、一歩リードすればいいんだから。」

黒雪はアリアを追いかけ、部屋の中をぐるぐる回り始める。

「キンジ！ーあんだ、クライアント依頼主にキスしたの！？この破廉恥武偵！！。」

アリアはベランダに逃れているキンジに向かって言う。

「い、いや、それはだな」

弁明しようとする。しかし、武偵は弁明を問わない。ましてやアリアが弁明を聞き入れるとは思えない。

「破廉恥武偵には、お仕置きよ。」

ガバメントを抜き、キンジに向かって容赦なく発砲。キンジは、またしても冷たい東京湾で水浴びをする羽目になった。

「懲りないね。」

明は、救助したキンジに言う。

「ほっとけ。」

「まさか、二人の仲がそこまで進展しているとは思わなかったよ。」

「うるせえ。」

キンジは否定的態度を取っているが、明には、と言いか殆どの目に明らかのように、白雪はキンジの事が好きなのである。

「周りの、女性関係を見直した方がいいと思うぞ。以外にも、キンジに惚れている奴が多いからな。」

明は、マンションの一角を見ながらそう言ったのであった。その場所に居たのは、意外な人物であることに、キンジは後に知る事になる。

突然の再会

—キンジの部屋—

アドシアードの後片付けを終え、クタクタで帰ったキンジの元に一本の電話が鳴った。

「はい？」

『キンジね。あんた、何処にいるの？』

相手はアリアだった。

「何処だっけいいだろう。何だよ？」

『すぐ、女子寮の1011室へ来なさい。待ってるから。』

「い、行きたかないよ。女子寮なんか。」

逆は理解できなくもないが、男子が女子寮に行くのは対面的にもかなり悪影響を及ぼす。それに、性格的に行きたくない。

『うるさい。私がすぐと言ったらすぐ。来ないと風穴。』

つと、言っただけで電話を切られた。もはや、議論の余地も無い程の手際で、受け答えの余裕も無かった。

—第二女子寮 1011室—

「アリアの奴、何でわざわざ呼び出したんだ？」

いつもは無理やり部屋に押しかけ、問答無用で居座っているのに。今回は様子が変だと、キンジも悟っていた。

「遅い。」

つと、ご機嫌斜めなアリアがドアを開け、開口一発目で『遅い』。

「でも、許してあげる。」

妙に笑顔になり、手を掴んで部屋の奥に入れる。部屋の中には・・・色々とヤバい服からメイド服、ゴスロリ衣装などがハンガーで掛けられている。

「キンジ、どれがいい？キンジのリクエストした服、特別に着てあげる。」

そう言つて右足を足払い。キンジはバランスを崩して、ベッドへ仰向けに倒れ込む。

「な！？」

驚いたキンジの上に。

「キンジ！」

アリアがジャンプ。騎乗位つて言う大勢にあった。その状態なら、嫌でも

（なっちまったな。）

「くふふ、キンジ。覚悟ー！」

キンジはヒステリアモードになる。そして、自分の上に乗っている者が

「理子。」

「うふ。」

理子だと分かった。

「ビンゴー、やったあー！」

そう言つて変装用マスクと鬘かつらを取る。現れたのは武偵殺し事、理子であつた。

「その通り。りっこりんです。ただいま、キンジ。」

声を戻し、普段の声でキンジに言う。

「お前、どうしてここに？」

「ねえー、キー君。えっちい事、しよ。」

キンジの話を無視し、……話がヤバい方向へ向かっていく。

「理子は悪い子だもん。キー君がアリアの物でも、盗んじゃう。だって、私の曾おじい様は怪盗だもん。」

理子はリヨパン4世。つまり、フランスの大怪盗であるアルセーヌ・ルパンの曾孫に当る。

「しかし理子。君は俺の兄さんの事も盗んだ。」

「まだ、殺したと思ってる?」

「どういう意味だ?」

「そのまんまの意味。」

「兄さんの生きている証拠は?」

ヒステリア・サバン・シンドローム
「HSS」

キンジの一種の遺伝病。それを理子が知っている。

「理子は誰も殺していない。だから、武偵殺しは間違った仇名。」

少し、裏理子を混ぜて話すか、直ぐに表理子に戻り

「ここでルート分岐。理子を受け入れてくれたら、お兄さんの話を一杯してあげる。」

美少女ゲーム的なノリで言い出した。

「キー君、理子を彼女にしちゃおうよ。そうすれば、何時でも好きな時間に好きな場所を触っていいよ。」

そう言つてセーラー服を脱ぎかけた所を

「でも、理子。ハーレムルートと、エンディングで男性絡みなの。嫌いなんだよね。」

裏理子を混ぜて再びいった時。

「私の奴隷を盗むな!!」

外からフックを使つて、窓を蹴破つて本物のアリアが入つて来た。

「こつちからも、逃がさないよ。」

扉には、立膝状態でM82を構える明が居る（通常、このような状態でM82を撃つことは出来ない。）。

「はあ、イベントシーンに別ヒロインが飛び込んでくるゲームがあると思う？そんなゲーム、理子的には恋愛ゲーム失格なんですけど。」

「この汚らしい泥棒一族。私の物は盗めないわよ。」

顔を少し赤くして言うあたり、外で聞き耳を立てていたのだろう。

「ふん。でもキー君。私の胸で墮ちるの3秒前だったわよ。女の子の胸につづく跪かない男子はいないので。」

理子が力説する。

「あ！、でもアリアには関係ないか。」

アリアの胸を見て、挑発的に言う。

「う、うるさい。風穴！風穴！。風穴開けてやる。」

つと、理子の挑発を受けて怒り出す。

「アリア、理子の言う事を間に受けるな。」

明がアリアに向かって言ったところを

「はあ、全く。理子の初めてのイベントシーンを邪魔するなんてそれに、まさか明まで来るとは予想外だけだね。」

そう言つてスカートの中から何か、球体が2つ落ちる。それは床に落ちたと同時に爆発。関光を放った。

「フ、フラッシュグレネード。」

簡単に言つと、スタングレネードの音が無いバージョンである。それによって暫くの間、視力を奪われる。

視力が回復すると、辺りを見回す。

「アリア、外だ。」

明がキンジの上に乗っているアリアに言う。

「上よ。リールで上へ向かってる。」

ベランダに出て確認したアリアは言う。

「よく、ここが分かったな。」

「探偵科の奴に、キンジの居場所を聞いたら帰ったって言ってな。部屋に電話しても出ない。仕方がないから衛星で探したら、着信履歴からここだって分かった。」

明が説明する。

「相変わらず、日本はプライベートを保証された監視社会だと言う事が分かるよ。」

日本には街灯などに偽装した監視カメラが多数設置されている。日本だけでなく、これは世界にも言える事だが、監視されていない人が存在しないとされるほどまで人間はプライベート社会という名の監視社会を生活している。

「理子!!」

屋上の扉が普通に開いているのに、アリアは思いつき蹴り開けた。

「今夜は良い夜。」

フェンスに腰掛けている理子はアリア達が来たのを確認して言う。

「峰・理子・リュパン4世。今度こそ逮捕よ。ママの冤罪を償わせてやる。」

「やれるもんならどうぞ。ライミー」

ライミーとは、イギリス人に対する侮蔑語である。もともと、イギリス海軍が水兵のビタミンC不足を補うために大量のライムを積んで航海に出て、強制的にライムジュースを飲ませたことから、今ではイギリス海軍兵（水兵）、イギリス人に対する蔑称。

「やってやろうじゃない。フロツギー」

フロツギーとはイギリス人によるフランス人の限定的侮蔑語である。フランスでは蛙を食べる習慣を持っており、今でも田舎の方では釣ってそのまま食べる人も居る。

二人は、それぞれ戦闘態勢である。二人の間にあるのは、まるで国家の命運を背負うジャンヌ・ダルク様なものである。歴史上、英仏は幾度となく戦争をしている。その中でも代表的なのが百年戦争とナポレオン戦争である。

その後も言い合いが続く。胸の大きさ、頭の良さなど言い合う。

「なあ、キンジ。」

「なんだ、明？」

「女って、怖いよな。改めて、そう思うよ。」

「俺もだ。」

「でも、この戦い。ハッキリ言ってどんぐりの背比べだと思っるのは、僕だけだろうか？」

「安心しろ。俺もだ。」

戦いに入れない男。傍から見れば、空しい存在である。

「落ち着いたか？」

二人が疲れた所を止めに入る。

「それじゃあ、アリア。もう理子と遣り合うな。」

「な！何でよ！？」

「恐らく、理子は司法取引をしたんだ。武偵高校へ戻ってこれたのもそれだろう。」

司法取引とは、犯罪者が犯罪捜査への協力などで罪が軽くなる、もしくは無くなる制度である。よく、アメリカ映画でも登場するが、実在する制度である。日本では埼玉愛犬家連続殺人事件や柏原市パチンコ店強盗事件が裁判で注目された。

「あつたり〜。キー君、やっぱり理子の事を分かってくれんだね。」

「う、嘘よ。そんな手に私が引つ掛かるとでも。」

「本当だ、アリア。」

明がヘッドセットを外して言う。

「今、確認を取った。理子は司法取引を適応し、罪は不問とされた。しかも、ちゃっかり損害費支払いを自由同盟にしゃがった。」

「だって、豪華客船から飛行機、それに橋からバスから自転車から、総額すると理子じゃとても払えないんだもん。」

「あいな。」

理子の手際の良さには明も驚いた。気付く前に既に書類にそう書かれ、しかも厳重な金庫に保管されている。そうなった以上、自由同盟が損害費を支払わねばならない。

「でも、ママの濡れ衣を着せたのはこいつよ。裁判で証言しないって言うなら『良いよ』。力づくでって……今、なんて？」

「だから、証言してあげる。」

突然の証言。

「でもその代り、アリア、キンジ、明。」

笑顔になって

「ブラドの屋敷にある理子の大切な物を盗む、泥棒やろうよ。」

交換条件を出してきた。

突然の再会（後書き）

理子が絡むと、作者的にも遣り難い。今回から暫く、作者の心が崩壊しかけます。

理子からの依頼 1

―武偵高―

帰ってきた理子をクラスの人間（主に女子）が取り囲んでワイワイ騒いでいる。

「あゝ、腹立つ。司法取引で戻って来なかったら、風穴開けて、風穴地獄へ送っていた。」

クラスの隅で、アリア、キンジ、明がクラスの人間に取り囲まれている理子を見ている。

「アリア、よく分かんがやめとけ。」

キンジは先ほどのアリアの発言について注意する。

「まあ、理子は風穴開けた位じゃあ、死なんとは思っぞ。ああ見えて、しぶといしな。」

明は理子を見ながら言う。

「そんな事より、本気で理子の依頼を受けるのか？あいつは俺達に盗みの片棒を担がせようとしてるんだぞ。」

キンジは小声でアリアの耳元に囁く様に言う。

「良くないに決まってるでしょう。リヨパン家の人間と組むなど、ホームズ家始まって以来最大の不祥事よ。でも、今は状況が状況な

の。」

「状況？」

「理子がママの事件の証言をしてくれるし、私にとってこの上ない事よ。」

「でも、窃盗の前科が付くんだぞ。まあ、武偵でる以上、その辺が身綺麗だという方が少数派だが。」

「ブラドはイ・ウーのメンバーなの。イ・ウー相手なら、強盗容疑で逮捕されても、起訴されない。彼らは法律^{ほう}の外の存在よ。」

「だから、いい加減イ・ウーが何なのか教えるよ。」

「無理。」

「パートナーの俺でもか？」

「知ったら、殺されるよ。キンジ。」

突然、明がキンジに向かって言う。

「殺される？」

「彼らはそう言う存在だ。自由同盟を知る分には自由だが、イ・ウーについては教えられない。」

―狙撃科塔―

（つと、言っても。何時かは知る事になるがな。）

修理されたばかりのM82を構え、的に狙いを付ける。

（風向き、北北東12°。風速8）

スコープのネジを弄って、データを入れる。

「狙撃手は、ただ待つこと。待って、待って、待ち続け。獲物がスコープの十字架に掛けられたその時、私は全てを解放する。」

明は詩を詠み、引き金を引いた。1.5km先の目標の中央を寸分違わずに撃ち抜いた。

「私は一発の銃弾、銃弾は人の心を持たない。故に、何も考えない。ただ、目標に向かって飛ぶだけ。」

隣ではドラグノフを構えたレキが的に向かって銃弾を発射。同じく、寸分違わずに中央を撃ち抜いた。

「レキ、ドラグノフでよくこんな距離を撃ち抜けるな。」

「銃は裏切りません。私の思うとおりの仕事をしてくれます。」

「その銃を、信賴しているんだな。」

「はい。」

「じゃ、良いものを見せてやる。」

そう言つて今度は3000mの目標を狙う。誰も、撃ち抜いていない距離だ。

「狙撃手は、ただ待つこと。待つて、待つて、待ち続け。獲物がスコープの十字架に掛けられたその時、私は全てを解放する。」

再び詩を詠み、引き金を引く。一直線に向かつて行つた銃弾が、途中で自在に向きを変え、まるで銃弾が踊っているような動きを見せる。そして、的の中央を撃ち抜いて停止する。

他の生徒は呆然と見ている。銃弾が、常識を超えた軌道をして目標を撃ち抜いたからだ。

「これが、僕の本当の二つ名。『魔弾まだんの射手しゃしゅ』だ。」

レキを含め、全員が驚きから目覚める。そして、ほぼ全員が『すげー』などの称賛の言葉を送る。

—キンジの部屋—

「それで、イ・ウーのブラドと言つのは何者なにモンなんだ？」

明は部屋に帰るになり、キンジに質問された。

「まあ、その位はいいだろう。」

「それぐらいは話してくれよ。できるだけ、詳しく。」

「つと、言っても。殆ど謎の存在だ。姿だつて、見た奴は少ない。だから、そこまで詳しく良い事は。分かつているのは、奴はイ・ウーのナンバー・2で、『無限罪のブラド』と呼ばれている。まあ、それほどまでに罪を犯していると言う事だ。」

「そんな危険な奴と遣り合うのか？」

「情報じゃあ、奴は日本には居ないと思った。遠くに、この世の果てに居ると言う事ぐらいしか分かん。奴の別荘が横浜郊外にある。恐らくは、そこに泥棒しに行くのだろう。」

「そこまで知っているのかよ。」

「詳しい事は知らんと言った筈だ。とにかく、謎の存在だ。まあ、理子か……。あと一人。近いうちに会っだろうから、そいつにでも教えてもらいな。」

「あと、一人？」

「忘れない人間だよ。この前も会っているしな。」

「誰だよ？」

「鈍いな。まあ、後のお楽しみ。直ぐに分かるから良いよ。」

明は不敵な笑みを浮かべてキンジを見る。

理子からの依頼 1（後書き）

外伝編で明の魔弾を出したので、こっちでも出しました。

理子からの依頼 2

— キンジの部屋 —

暫くして、アリアも帰ってくる。

「それで、受けるの？。あんた豪^{えら}く理子に御執心だし。」

ソファに座り、椅子に座っているキンジに嫌味交じりで言う。

「ああ。受けるよ（断ったら、風穴つと叫んで発狂して、銃を乱射されるからな）。」

「かわいい子に泣きつかれたから、助けようって事ね？」

アリアが身を乗り出して言うてくる。

「そ、それはお前には関係ないだろう。」

「大有りよ。あんたは私だけの物^{トレイ}なんだからね。」

「アリア、その辺でやめといた方がいいぞ。」

明がキッチンから出てくる。

「料理なんかできたの？」

「白雪のを見てな。最低ラインは覚えたよ。」

次の日の学科別研修のとき、事件は起きた。理子とキンジは遺伝子に関するビデオ自習の時に色々と破廉恥な行為を行った。そして、理子は出際良く逃げ、手際の悪いキンジは教師の小夜鳴に呼び出れていた。

―狙撃科塔―

「南郷先生は今日は教務科の方で仕事があるそうです。」

狙撃科の先生である南郷は一年生の武偵ランク処理で忙しく、来れない。

「そうか。南郷先生は来れないのか。」

M82を構えている明はそう小声で言う。

「レキ、どうせなら前に出来なかった勝負でもするか?」

隣にいるレキにそう話しかける。

「私は構いません。」

「勝つたらどうする?」

「カロリーメイトを奢^{おこ}ってもらいます。」

明は吹きそつになった。

「カロリーメイトとは。安いもんだな。」

そう言つて一発目を放つ。1500m、命中。

「私は、一発の銃弾……。」

そう言いながら、1500、1600、1700……と2000mまで命中させる。

（レキ、やっぱり彼女はあの、母が話していた。）

ロシア人の母を持つ明は、その母からロシア国境近くのパイカル湖周辺に住む少数民族の話聞いた事がある。おして、母もそこ出身。

（母から聞いた、ウルスの姫。それと同名の人間。性別も女。そして、小食で常に戦闘に構える姿勢。間違いない。彼女は。）

そう考えながら撃つた為に、目標を外してしまった。

（しまった！）

「手を抜きましたね。」

レキは立ち上がりながらそう言つ。

「でも、約束は約束です。カロリーメイトを箱ごと奢ってもらいます。」

そう言つて、立ち去る。

（ハハハ。しかし、彼女がウルス族の姫となると。・・・難しいな、こりゃ。）

武偵高を出ると、雨が降っている。

（傘忘れてたな。）

鞆を傘代わりに歩いていると。

「キンジ。」

走るキンジを見つける。

「あ、明か。あ、後にしてくれ。」

つと、急ぎ足の様子だった。そこへ、

「キンちゃん。帰ってきたら続きやろうね。続き、約束だよ。」

つと、下着姿の白雪が保健室の窓から顔を覗かせている。

「き、キンジ。お前。」

「言っな!。」

そう言っただけでキンジは走って行った。

（キンジはキンジで。苦労してるんだな。）

明は帰りにコンビニに立ち寄り、レキとの勝負に負けた時の約束。カロリーメイトを箱買いする。

「しかし、幾ら戦闘に備えるったって。常にこんな食ってると、身が持たんぞ。レキは絶対、胃袋が退化してるな。」

臓器も十分な働きが無いと退化していく。

――女子寮――

「約束のカロリーメイト。箱買いの。」

寮に気付かれない様に入り、速攻で階段を駆け上って最上階のレキの部屋に来た。雪山での訓練で、明の脚力は並みの人間レベルではない。

「ありがとうございます。」

レキはそれを受け取る。

「それと、キンジの部屋を見張るのはほどにしてくれないか？
誰かの依頼だろうから強くは言えんが。」

「気づいてたんですね。」

「僕は君よりも視力は1ランク上。7・0だよ。」

そう言つて、来た時と同じように速攻で階段を降り、キンジの部屋に戻つた。明日は、理子と仕事の打ち合わせ。秋葉原まで行く事になる。オタクの整地、秋葉原に。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4879t/>

緋弾のアリア

2011年12月25日16時45分発行